

# 高田遺跡第33次・第35次

発掘調査報告書

2015

掛川市教育委員会







# 高田遺跡第33次・第35次

発掘調査報告書

2015

掛川市教育委員会



## 例　　言

- 1 本書は、平成24年度に現地調査を行い、平成25、26年度に整理調査を行った、高田遺跡第33次、第35次発掘調査の報告書である。
- 2 調査は、個人住宅建築に伴う緊急発掘調査（第33次）および茶園改植に伴う緊急発掘調査（第35次）で、国および県の補助金を得て、掛川市教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査に係る期間、担当は以下のとおりである。

### 第33次発掘調査

確認調査 平成24年2月27日、28日 木佐森道弘  
本発掘調査 平成24年5月24日～9月14日 井村広巳

### 第35次発掘調査

確認調査 平成23年10月31日～11月1日 木佐森道弘  
本発掘調査 平成24年7月17日～11月16日 夏目不比等

- 4 発掘作業並びに整理作業には、以下の方々の参加を得た。（順不同）

発掘作業 池田正夫 太田敏子 落合政徳 鈴木良晴 多賀一美 寺沢巧 長尾秀雄  
野中きみ子 深田重男 福田貞夫 溝口玉緒 山崎シズ 山崎富士男  
整理作業 棚葉豊子 笠谷みゆき 早乙女のぞみ 徳川浩 竹田徳子 太田敏子  
溝口玉緒

- 5 第35次発掘調査出土の鉄製品について、（財）静岡県埋蔵文化財センター大谷宏治氏から御教示、ご助言をいただいた。記して感謝の意を表したい。
- 6 本書の執筆、編集は、第33次調査については井村広巳が、第35次調査については夏目不比等が行った。
- 7 調査によって得られた資料及び出土遺物は、掛川市教育委員会社会教育課が保管している。

## 凡　　例

- 1 本書で用いる座標値は世界測地系に基づく。包廃は座標北とし、L = 標高である。
- 2 遺構の略番号は、以下のとおりである。  
SB：堅穴住居跡 SH：掘立柱建物跡 SP：小穴 SF：土坑墓 SD：溝  
なお、高田遺跡第35次の方形周溝墓は、周溝をSDで示している。
- 3 遺構番号は、現地調査時に呼称したものをそのまま使用した。
- 4 遺物の番号は、挿図と写真図版と同一である。

# 目 次

## 例言 凡例

Iはじめに	
1 調査に至る経緯	1
2 掛川市および遺跡の環境	1
(1) 地理的環境	1
(2) 歴史的環境	2
II 高田遺跡第33次発掘調査	
1 調査に至る経緯	9
2 調査の方法と経過	9
3 調査の成果	10
III 高田遺跡第35次発掘調査	
1 調査に至る経緯	17
2 調査の方法と経過	17
3 調査の成果	19
(1) 遺構	
① 壺穴住居跡	19
② 墨立柱建物跡	20
③ 方形周溝墓	20
④ 溝状遺構	21
⑤ 土坑墓	22
⑥ 近世土坑墓	23
(2) 遺物	
① 土器	24
② 鉄製品	28
③ 砥石	30
④ その他の遺物	31
4 まとめ	50
IV おわりに	53

## 挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡位置図.....	4
第2図 調査地点位置図.....	5

### 高田遺跡第33次発掘調査

第3図 遺構全体図、SB01実測図 .....	11
第4図 SH01、SP12、SP28、SP29、SP33、A-3区炉実測図 .....	12
第5図 出土遺物実測図.....	13

### 高田遺跡第35次発掘調査

第6図 遺構全体図.....	32
第7図 SB01実測図（1）.....	33
第8図 SB01実測図（2）.....	34
第9図 SH01実測図 .....	35
第10図 SH02実測図 .....	36
第11図 SD04実測図 .....	37
第12図 SD07、SD08実測図 .....	38
第13図 SD09実測図 .....	39
第14図 SD02、SD05実測図 .....	40
第15図 SF02、SF03、SF04、SF06、SF08実測図 .....	41
第16図 SF14、SF16実測図 .....	42
第17図 出土遺物実測図（1）.....	43
第18図 出土遺物実測図（2）.....	44
第19図 出土遺物実測図（3）.....	45
第20図 出土遺物実測図（4）.....	46
第21図 出土遺物実測図（5）.....	47
第22図 出土遺物実測図（6）.....	48
第23図 出土遺物実測図（7）.....	49

## 写真図版目次

カラー図版1 上 第35次発掘調査 北半部完掘（西から）

下 第35次発掘調査 南半部完掘（西から）

カラー図版2 上 第35次発掘調査 SB01、SH01（西から）

下 第35次発掘調査 SD04、SD09（西から）

### 高田遺跡第33次発掘調査

図版1 上 調査区完掘（南から）

下 SH01 完掘（南から）

図版2 上 SB01 焼土（南から）

中 SB01 完掘（南から）

下 A-3区 炉（南から）

### 高田遺跡第35次発掘調査

図版3 上 SB01 検出（南から）

下 SB01 床 検出（南から）

図版4 上 SB01 炉 検出（南から）

下 SB01 炉（南から）

図版5 上 SB01 炉 断面（北から）

下 SB01内 SP33、SP34（西から）

図版6 上 SB01内 SP35、SP36（西から）

下 SB01 完掘（南から）

図版7 上 SH02 完掘（北から）

下 SH02内 SP46 土器出土状態（南から）

図版8 上 SH02内 SP47 土器出土状態（南から）

下 SD04 C-C'（西から）

図版9 上 SD04 D-D'（東から）

下 SD05、SD07 A-A'（東から）

図版10 上 SD09 遺物出土状態（北から 土器28）

下 SD09 遺物出土状態（北から 土器33）

図版11 上 SF02 完掘（北から）

下 SF02 遺物出土状態（北から）

図版12 上 SF03（東から）

下 SF04（北西から）

図版13 上 SF06（南東から）

下 SF14（北から）

- 図版14 上 SF16（南から）  
下 SF16 遺物出土状態（南から）
- 図版15 出土遺物（1）
- 図版16 出土遺物（2）
- 図版17 出土遺物（3）
- 図版18 出土遺物（4）
- 図版19 出土遺物（5）
- 図版20 出土遺物（6）



## Iはじめに

### 1 調査に至る経緯

和田岡原上には、縄文時代から古墳時代までの遺跡が数多く分布しており、高田遺跡はその和田岡原のほぼ中央に位置している。

和田岡地区は茶葉が盛んであり、広大な茶園が広がっている。茶業従事者は減少しているが、作業の機械化が進んでおり、1軒の農家で広大な茶園を効率よく経営している。乗用型摘採機の普及により、機械の使用に適した茶園にするため圃場の整理や、より良い品質の茶を生産するため茶樹の改植が行われている。近年の改植では、水はけを良くし、茶樹の根が広がり、より多くの栄養などを摂取できるようにするために深耕が行われる。深耕は地表から1m前後の深さまで掘り起こし、天地返しが行われるため、地中の遺跡が破壊される恐れが生じている。

また、一方で茶業従事者の高齢化や後継者不足のため、茶葉をやめるもしくは縮小して、茶園を宅地に転じるケースも増えてきており、住宅等の建築により遺跡が破壊される恐れも生じている。

このような、やむを得ず破壊される遺跡に対し、掛川市教育委員会では記録保存のための発掘調査を実施している。平成24年度には高田遺跡内で2件の本発掘調査を実施した。第33次調査は個人住宅建築の計画を、第35次調査は茶園の改植計画を受けて、本発掘調査に至ったものである。

### 2 掛川市および遺跡の環境

#### (1) 地理的環境

掛川市は静岡県の西部地方の東端にあり、日本の国土のほぼ中央に位置している。大井川と天竜川に挟まれ、静岡県内の政令指定都市である静岡市と浜松市の中间にある。

南北に約30km、東西に約15kmと南北に細長く、中央でくびれた形をしている。

市域の北部には栗ヶ岳を中心とする日坂山地、市内最高峰である八高山を中心とする八高山山地、大尾山を中心とする原野谷川流域山地が広がっている。日坂山地からは倉真川と逆川が、八高山山地からは原野谷川が市内を流れている。これらの河川と支川とが、砂礫台地、谷底平野、三角州からなる低地を流域に形成している。

その低地部分を取り巻くように丘陵地があり、市中央部にある小笠山を中心とした小笠山丘陵は南に大きく広がり海岸へ2kmと迫っている。小笠山丘陵から流れ出る東大谷川、西大谷川とその支川が丘陵の南に谷底平野、扇状地などの低地を形成している。同じく小笠山丘陵から流れ出る下小笠川は市南東部を流れ菊川に合流する。同様に菊川に合流する佐東川とともに流域に肥沃な平野を形成している。

市域南端の沿岸部では海岸と並行に砂丘列が並び、海岸線から約2kmの幅で砂丘列とその間の低地や後背湿地からなる海岸平野が広がっている。

今回発掘調査を実施した高田遺跡は、高田原と呼ばれる標高50~40m台の段丘面に所在している。高田原は原野谷川の右岸に形成された河岸段丘であり、その上位段丘面として標高60m

台の吉岡原があり、両方を合わせて和田岡原と呼ばれている。和田岡原は同じく原野谷川の上流で形成された原谷、原田、原泉地区の段丘と比べても広大な面積となっている。

その和田岡原上には縄文時代から古墳時代にかけての遺跡が広範囲に所在し、高田原だけでも、高田遺跡の他に10を超える遺跡が所在している。和田岡原は表土である黒褐色土の下に透水性の低い粘質の黄褐色土が堆積しており、遺構は黄褐色土層まで掘り込まれて築かれている。

## (2) 歴史的環境

掛川市で見つかっている最古の遺物は溝ノ口遺跡、瀬戸山Ⅱ遺跡から出土した旧石器時代のスクレーパーである。遺構に伴うものではなく、詳細は不明であるが、掛川市域内で旧石器時代から人類が生活していたことを示す貴重な資料である。

縄文時代になると、原野谷川や逆川などの河川に沿った小高い場所に集落を営んでいたことがわかっている。海に近いところでは低地部分から縄文時代の遺物が出土している。縄文時代には現在よりも海が内陸に入り込んでおり、当時の海岸線を考えると、海にごく近いところから出土している。

縄文時代の最も古い遺物は、高田上ノ段遺跡で表採された槍先形尖頭器で、縄文時代草創期まで遡る可能性がある。市内最古の土器は、縄文時代早期の押型文土器である。和田岡原上でも瀬戸山Ⅰ・Ⅱ遺跡、高田遺跡で出土している。また、中原遺跡、高田遺跡、今坂遺跡で、縄文時代中期の石囲い炉を伴う堅穴住居跡が発見されている。縄文時代後・晩期になると資料は減少し、この時期の詳細は明らかにされていない。

弥生時代には稻作を行うため、河川沿いの低地に住むようになる。平野への進出が進み、低地の広い範囲が遺跡となっている。その一方で縄文時代と同様に、小高い場所に位置する弥生時代の集落も多数所在し、継続して生活を営んでいたことが窺える。

和田岡原上にも弥生時代の遺跡が多く所在している。前期、中期の資料は少ないが、今坂遺跡では中期の土器棺墓が発見されている。女高Ⅰ遺跡では和田岡原上で初となる、中期の堅穴住居跡、方形周溝墓が発見されている。弥生時代後期になると遺跡の数は各段に増加し、今坂遺跡、女高Ⅰ遺跡、溝ノ口遺跡、東原遺跡、吉岡原遺跡、高田遺跡など段丘の縁辺部で多数の集落跡が発見されている。また、溝ノ口遺跡、今坂遺跡、高田遺跡では布掘りを持つ掘立柱建物跡が発見されている。弥生時代後期からは段丘内部にも集落が築かれるようになっていく。

古墳時代になると、平野を見渡せる丘陵上に高塚を有する古墳が築造される。古墳は市内に広く所在しているが、市内北部の丘陵地に多く分布しており、調査事例も多い。

和田岡原上の古墳時代前期の遺跡は弥生時代後期から継続する集落跡が多い。高田遺跡、瀬戸山Ⅰ遺跡では一辺7mの大型住居跡が発見されている。

中期には市内北部を中心に和田岡古墳群をはじめとして、大規模な墳丘を持つ古墳が作られるようになる。一方で、この時代の集落跡については遺構、遺物が少ない。近年になって女高Ⅰ遺跡、高田遺跡で古墳時代中期の堅穴住居跡が発見され、資料も増加しつつある。大規模な古墳を築造した集団が存在していたはずであり、今後の調査成果が待たれる。

古墳時代後期になると墳丘を持つ古墳以外にも、斜面に横穴を掘り築かれる横穴墓も盛んに作られるようになり、古墳時代の終わりまで続く。横穴墓は逆川流域や佐東川流域などに集中

し、原野谷川の左岸も逆川流域同様に集中しているが、和田岡原ではほとんど見られない。和田岡原の古墳時代後期の遺構としては、高田上ノ段遺跡で円墳の周溝が発見され、和田岡原ではないが、原谷地区の小段丘上に所在する幡鎌峯山遺跡で竪穴住居跡が発見されているが、未調査の古墳も多く詳細はわかっていない。

古代の掛川市では六ノ坪遺跡で当時の役所か寺の跡と考えられる建物跡群が発見されている。また、清ヶ谷では大規模な古窯群が営まれ、国分寺の瓦などが焼かれていた。和田岡原ではこの時代の資料は少ないが、林遺跡で平安時代の竪穴住居跡が発見されている。以降の様子はまだ明らかにされていない。

中世になると、市域内には莊園が広がり、地方豪族が各地に現れるが、駿河の今川氏の勢力が大きくなるにつれ、その配下に収まっていた。今川氏の衰退後は遠江の霸権を掛けた高天神城をめぐる攻防が徳川氏と武田氏とで繰り広げられた。高天神城周辺には多くの砦が築かれ、城攻めの前線基地として横須賀城が築かれている。最終的に徳川氏が勝利すると、高天神城は廃城となつたが、横須賀城及び掛川城は天守閣を有する近世城郭として存続した。

江戸時代には掛川市域には掛川藩と横須賀藩の2藩が成立し、それぞれが城下町として栄えた。また、掛川城下は東海道の宿場でもあり、日坂宿とともに宿場町としても栄えていた。

明治維新後、掛川藩、横須賀藩とともに静岡藩の領地内となり、廃藩置県後は静岡県に属し、浜松県成立に伴い転属した。その後、岡県は合併を経て現在と同様の静岡県の形となつた。掛川市内は多くの町村に分かれていたが、数々の合併を繰り返し、平成17年4月に現在の掛川市となつた。

#### 参考文献

- |          |   |
|----------|---|
| 掛川市      | 1997『掛川市史 上巻』                             |
| 掛川市      | 2000『掛川市史 資料編 古代・中世』                      |
| 掛川市教育委員会 | 1990『藤六・3号墳・高田遺跡発掘調査報告書』                  |
| 掛川市教育委員会 | 2009『今坂遺跡第6次調査 濱戸山Ⅱ遺跡 高田遺跡第21次調査 発掘調査報告書』 |
| 掛川市教育委員会 | 2010『瀬戸山Ⅰ遺跡第3次調査 古明暁跡 内山遺跡発掘調査報告書』        |
| 掛川市教育委員会 | 2011『高田上ノ段遺跡発掘調査報告書』                      |
| 掛川市教育委員会 | 2013『幡鎌峯山遺跡 古岡原遺跡第10次 高田遺跡第25次 発掘調査報告書』   |
| 掛川市教育委員会 | 2014『林遺跡第2次 女高Ⅰ遺跡第15次 東原遺跡第8次 発掘調査報告書』    |
| 大須賀町     | 1980『大須賀町誌』                               |
| 大東町      | 1984『大東町誌』                                |



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	高田	鵜文・弥生・古墳	20	東登口古墳群	古墳	39	喜佐ヶ谷古墳群	古墳
2	西山城	中世	21	行人塚古墳	古墳	40	山崎	弥生・古墳
3	城ノ越	弥生・古墳	22	平田ヶ谷	鵜文・弥生・古墳	41	山崎古墳	古墳
4	東原	鵜文・弥生・古墳	23	女高I	弥生・古墳	42	土橋古墳	古墳
5	今坂	弥生・古墳	24	鶴塚古墳	古墳	43	土橋横穴群	古墳
6	溝ノ口	鵜文・弥生・古墳	25	高田古墳	古墳	44	高代山翁	中近世
7	中央	鵜文	26	高田古跡原	弥生	45	高代山古墳群	古墳
8	高田上ノ段	弥生・古墳	27	各和金鐘原	弥生	46	土橋古墳	古墳
9	吉岡大塚古墳	古墳	28	各和金塚古墳	古墳	47	桜田ヶ谷古墳群	古墳
10	吉岡下ノ段	鵜文・弥生・古墳・平安	29	名和氏館跡	中近世	48	桜田古墳群	古墳
11	豪林院古墳	古墳	30	中氏館	中近世	49	周津原I	鵜文・弥生
12	大向	鵜文	31	中殿谷古墳	古墳	50	旗菴古墳群	古墳
13	吉岡原	鵜文・弥生・古墳	32	東原城	中近世	51	胸袋古墳群	古墳
14	井	弥生・古墳・平安・中近世	33	冷池古墳	古墳	52	二反田	弥生
15	西村	古墳	34	鷺ノ台	弥生	53	高部城趾	中近世
16	瀬戸山Ⅲ	鵜文・弥生・古墳	35	穴ノ台古墳	古墳	54	岡津原Ⅲ	鵜文
17	瀬戸山Ⅰ	鵜文・弥生・古墳	36	若一王子塚古墳	古墳	55	胸袋横穴群	古墳
18	花ノ原	弥生・古墳	37	豪前横穴群	古墳	56	岡津原Ⅳ	鵜文・弥生・古墳
19	瀬戸山Ⅱ	弥生・古墳	38	堂前古墳	古墳	57	岡津原Ⅴ	弥生・古墳

第1図 周辺遺跡位置図



第2図 調査地点位置図



## 高田遺跡 第33次発掘調査



## II 高田遺跡第33次発掘調査

### 1 調査に至る経緯

平成23年11月に当地点において農地を転用し、個人住宅を建築する計画があることがわかり、土地所有者との協議の上、平成24年2月27、28日に確認調査を実施した。計画予定地内に幅0.7m、長さ31mのトレンチを南北方向に2本設定した。その結果、地表下0.8~1mまでは過去のお茶の改植により地山層の上部まで掘削を受けていたが、東側トレンチでは遺構の存在が確認され、遺物も出土した。計画地内は、南北2軒分の宅地に分譲する予定であるが、北側の住宅は地盤改良と浄化槽が埋設される部分について遺跡の破壊が免れないことが明らかとなつたため、記録保存のための本発掘調査を実施することとなった。

平成24年5月11日付けで、掛川市教育委員会は静岡県教育委員会に「埋蔵文化財発掘の届出書」を進呈した。これに対し、平成24年5月24日付けで、県教育委員会から事業者あてに、本発掘調査実施を内容とする「土木工事等のための発掘に係る指示について」が通知された。

### 2 調査の方法と経過

今回の調査区は、遺跡の消滅が免れない73m<sup>2</sup>である。

調査区の設定 対象地の地形に合わせて5m四方のグリッドを設定し、遺物の取り上げ、実測図面作成のための基準とした。東西の列を東からA、B、C…のアルファベットで、南北の列を北から1、2、3…の数字で表すこととした。それぞれの交点をその杭の名称とし、グリッド名は北東角の杭の名称と一致させた。

また、調査地点を国家座標で記録するために、基準点測量を業者に委託し実施した。

重機掘削 耕作土の除去を、重機（バックホー）を用いて行った。

遺構検出 最初は、遺構確認面において人力により、粗掘を行った。鍬と鋤簾を使用し、5~10cmほど地表を掘り下げた後、鋤簾を用いて新たな地表面を丁寧に削り遺構を検出した。

遺構掘削 検出した遺構は、移植ゴテを使用して掘り下げた。遺構の切り合い関係や堆積状況を確認するために、サブトレンチを設定し、あるいは土層帯を残して、土層の観察を行った。

遺構実測 遺物が集中して出土した場合は、遺物出土状態図を1/10の縮尺で、その他の所では平面図と土層断面図を1/20の縮尺で作成した。

写真撮影 現地記録写真の撮影は、6×7判（モノクロ）1台と35mm判（カラーネガ、リバーサル）2台、デジタルカメラ1台を使用した。

浄化槽調査 浄化槽の埋設部分についての調査は、業者による掘削に合わせて実施し、遺構の確認、掘削、平面図の作成を行った。調査は、南側の宅地に伴う浄化槽部分を9月7日、残る北側を9月11日に実施した。

整理作業 出土した土器は、表面がもろくなっているため水洗いした後、バインダー液にひたし、強化した。土器本体に出土位置を注記し、また接合復元した後、実測等の作業を行った。現地で作成した図面類は、報告書用に収集し清書した。そして、遺物の写真撮影、調査所見等を原稿にまとめ、印刷に付した。

### 3 調査の成果

調査区は、部分的に遺構検出面まで擾乱が及んでおり、遺構の残存状況は良好ではなかった。

調査では、竪穴住居跡1軒分、掘立柱建物跡1棟分の他、約30の小穴を確認した。遺構の年代は、弥生時代後期である。

#### 竪穴住居跡：SB01（第3図）

調査区北のB-1区に位置する。検出したのは住居跡南辺の一部分で、その大半は調査区外へ続く。規模は、東西2.8mを測る。掘方は検出面より下に5cm程度で、床面は検出できなかつたが、焼土が確認された。住居跡内に2つの小穴を確認したが、主柱穴となるか不明である。

遺物は弥生土器があるものの、小片で図示できるものはなかった。

#### 掘立柱建物跡：SH01（第4、5図）

A、B-2、3区に位置する。柱間は、梁間1間×桁行2間で、規模は2.8m×4.6mを測る。長軸の方位は、N 4°Wである。

第5図1、2が出土遺物で、1はSP26、2はSP37より出土した。1は、壺の底部で横方向のミガキが、内面はハケが施されている。2は、くの字口縁の壺である。口唇部には、刻目が施されている。スヌが部分的に付着していた。

#### 小穴：SP12（第4、5図）

C-1区に位置する。規模は長軸0.45m、短軸0.35m、平面形は楕円形を呈する。

出土遺物には、第5図3の高坏脚部小片があり、斜位のハケが施されている。

#### 小穴：SP28、29（第4、5図）

B-2区に位置する。SP28の規模は長軸0.7m、短軸0.55m、SP29の規模は長軸0.85m、短軸0.7m、平面形はともに楕円形を呈する。土層の堆積状況からSP29は、SP28より先行することが確認された。

出土遺物には第5図4の壺の体部小片があり、櫛描羽状文が施されている。

#### 小穴：SP33（第4、5図）

B-2区に位置する。規模は直径0.5mで、平面形は円形を呈する。

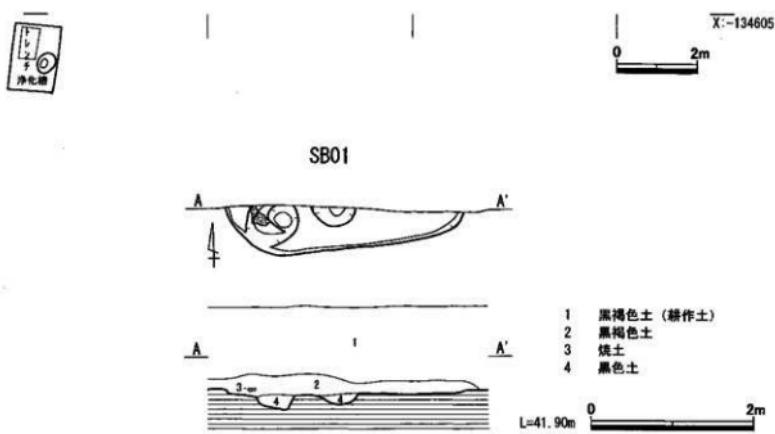
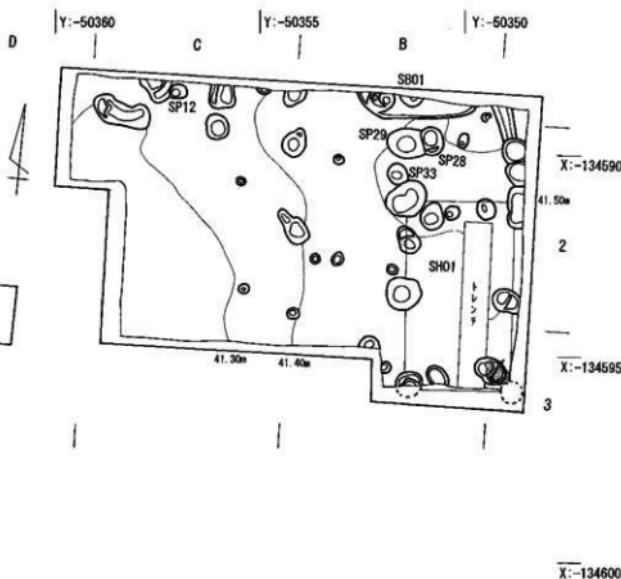
出土遺物は、第5図5の小型鉢の小片である。口縁部は折返されている。口径は小片のため、不明である。

#### その他：A-3区炉（第4図）

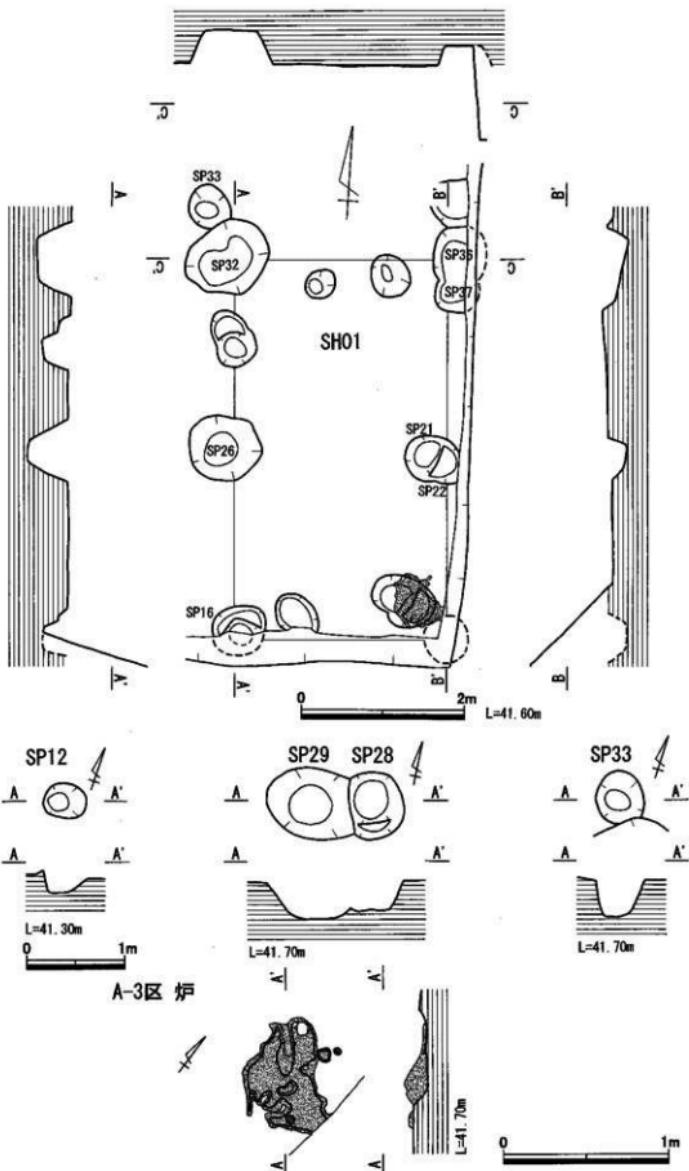
A-3区の小穴上に長軸0.7m、短軸0.4mの規模の炉が認められた。検出面まで擾乱が及んでおり、住居跡の掘方は、確認できなかった。

遺構に伴わなかった遺物は、以下の通りである。

第5図6は耕作土中から出土した折返口縁の壺で、内外面にハケが施されている。7は重機による表土掘削中に出土した壺底で、外面はハケ調整の後に粗いミガキが施されている。8、9は、排土中で採集したもので、8は高坏脚部片、9は櫛刺突羽状文が施された壺の肩部片である。10は重機による表土掘削中に出土した土玉である。直径4.5cmと推定される。表面は、ナデが施されている。

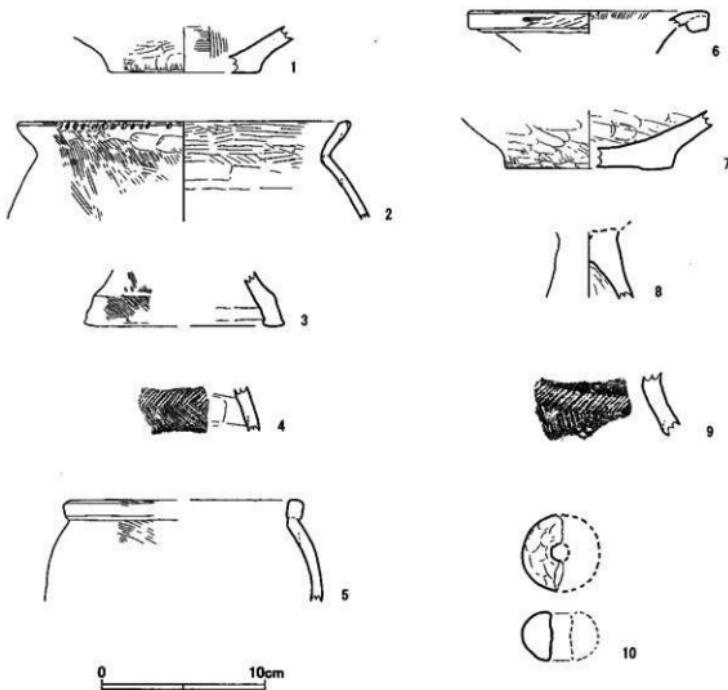


第3図 遺構全体図、SB01実測図

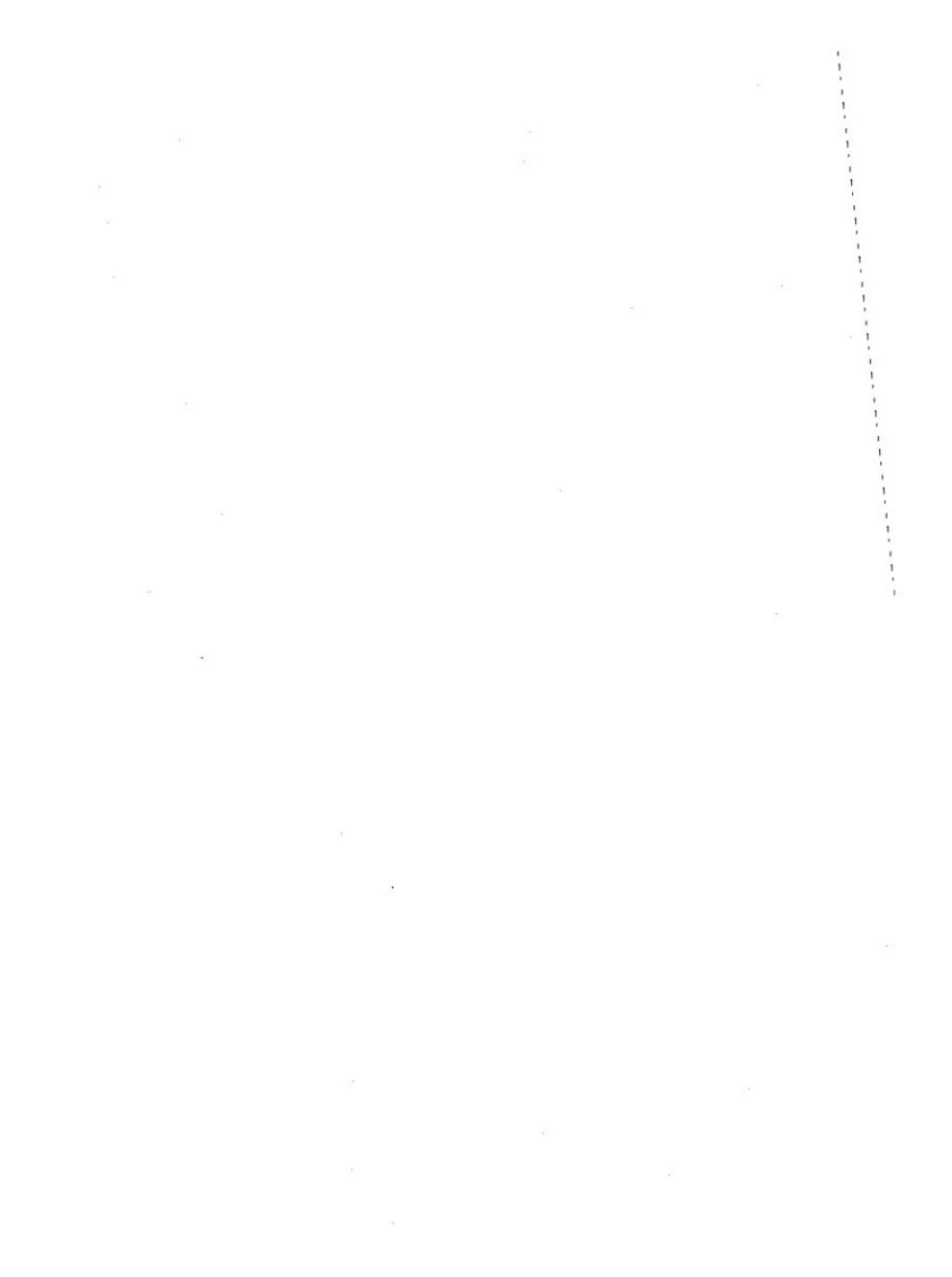


第4図 SH01、SP12、28、29、33、A-3区炉実測図

以上のように狭い範囲での調査であり、遺構の残存状況も悪く、出土土器も少ないので、調査地周辺には弥生時代後期（菊川様式段階）の集落が展開していたことが明らかとなった。高田遺跡は、高田原において南北1.3km、東西300mに及ぶ範囲に営まれた遺跡と示されている。今回の調査地点は、遺跡の南部に位置し高田遺跡の中でも調査があり進んでいない区域であることから、弥生時代後期における集落の動向を考える資料を得られたことは、重要である。



第5図 出土遺物実測図



# 高田遺跡 第35次発掘調査



### III 高田遺跡第35次発掘調査

#### 1 調査に至る経緯

平成23年度に茶園改植の計画があることがわかり、平成23年10月31日から11月1日まで確認調査を実施した。確認調査では小穴が検出され、弥生土器片が出土したが、茶園の中での調査であり、住居跡などの明確な遺構を確認することはできなかった。

しかし、平成元年度に実施された、東側隣接地の発掘調査では、据立柱建物跡や堅穴住居跡、小円墳の周溝等の遺構や弥生土器、鉄製品といった遺物が出土している。そのため、確認調査実施範囲外にも遺構が存在する可能性が高く、耕作者と遺跡保存のための協議を行った。協議の結果、遺構面から保護層を設けての改植は困難であるとの結論に達したため、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

#### 2 調査の方法と経過

今回の調査対象地は改植計画範囲としたが、隣地との境界から1~1.5m内側の1,300m<sup>2</sup>を調査した。調査で生じる耕土を置く場所を確保するため、調査区を南北2つに分割し実施した。北半部から調査を実施し、南半部を耕土置き場とした。反転後は北半部を耕土置き場とし、南半部の調査を実施した。

調査区は地形に合わせ、5m方眼のグリッドを設定し、実測、遺物取り上げの基準とした。グリッドは東西方向を東から西へA、B、C…とアルファベットで、南北方向は北から南へ1、2、3…と数字で表した。それらを組み合わせ、B-2区、C-3区等と呼称し、グリッド北西隅の杭にグリッド名を付した。調査地点を国家座標で記録するため、基準点測量を業者に委託し、実施した。

調査は平成24年7月17日から開始し、8月29日まで北半部の調査を行い、9月3日から5日まで反転を行い、9月6日から11月16日まで南半部の調査を実施した。

**茶樹粉碎** 重機による掘削に先立ち、トラクター1台を借上げ茶樹の粉碎を行った。

**重機掘削** パックホウ1台、クローラーダンプ1台を借上げ、不要な耕作土の除去を実施した。北半部の掘削を3日間、反転及び南半部の掘削を3日間かけ行った。また、調査終了後の埋め戻しも重機を用いて実施している。

**遺構検出** 重機による掘削後は、鍬、鋤簾を使用し人力で粗掘りを行った。5~10cm程度掘り下げた後、鋤簾で丁寧に土を削り遺構を検出した。

**遺構掘削** 検出された遺構は、移植ゴテ、竹ベラなどを使用して掘り下げた。遺構同士の切合い関係や土の堆積状況を確認するため、ベルトやサブトレーンチを適宜設定し観察を行った。

**遺構実測** 遺構の実測は、遺構平面図や土層断面図は縮尺1/20で作成し、遺物出土状態図や微細図は、縮尺1/10で作成した。

**写真撮影** 現地調査での記録写真は、6×7判カメラ1台（プロニーモノクロ用）、35mm判カメラ2台（カラーネガ、カラーリバーサル用）、デジタルカメラ1台を使用し撮

影した。調査区の全景写真及び遺構の垂直写真是業者に委託し、ラジコンヘリコプターを使用し撮影した。

現地説明会 市民向けの現地説明会を11月10日に開催した。午前と午後に1回ずつ説明会を行い、33名の参加があった。

整理作業 出土した土器は水洗いした後、脆くなっているものについてはバインダー液に浸し強化した。土器本体に注記を行った上で、接合、復元し、実測図を作成した。鉄製品は錆の進行を防ぐため保存処理を行い、その後実測図を作成した。現地調査で作成した図面は整理し、報告書作成用に編集、清書した。遺物の写真撮影を行い、報告を原稿にまとめて印刷に付した。



重機掘削



遺構掘削



遺構実測

### 3 調査の成果

第35次調査地点は耕作に伴う溝が、遺構検出面より深くまで達しており、遺構の残存状況は良好ではなかったが、弥生時代後期の堅穴住居跡、掘立柱建物跡及び方形周溝墓、古墳時代の土坑墓などが検出された。

#### (1) 遺構

##### ① 堅穴住居跡

堅穴住居跡は1軒検出された。

##### SB01（第7・8図）

B-5・6、C-5・6区にかけて検出された。長軸6.05m、短軸5.14mの南北方向に長い楕円形を呈し、長軸の方位はN-17°-Wを測る。厚さ5cm前後の褐色土を含む暗褐色土が貼り床としてほぼ全面に施されていた。床検出面の標高は49.5m、掘り方は南に緩やかに傾斜している。壁溝は確認できなかった。かは住居の中心からやや北に外れた位置で、2つのかが東西方向に重なって検出された。柱穴は貼り床検出面でSP33・28・35・27の4つが確認された。床下からは住居跡内北西でSP32とSP34、南西でSP31とSP36が検出され、計8つの柱穴が検出された。SP33と34、SP35と36とは互いに切合っていた。柱穴の底の標高はSP34のみ49.30mと若干浅く、その他は49.2m前後であった。

柱穴の検出状況、切合の関係から当初はSP32・28・31・27を主柱穴とし、東側の2つはそのまま、西側の柱をSP34・36に変更し、最終的にSP33・28・35・27を主柱穴とする住居になったと考えられ、合計2回の改修が実施されている。

主柱穴間の心々での距離は、当初のSP32・28間で2.42m、SP31・27間で2.36m、SP32・31間で2.86m、SP28・27間で2.94mを測り、南北方向に長い長方形となっている。

第2段階ではSP34・28間が3.18m、SP36・27間が3.22m、SP34・36間が3.02mを測り、東西に長い長方形となっている。

最終段階では、SP33・28間が2.96m、SP35・27間が3.26m、SP33・35間が2.80mを測り、第2段階同様東西に長い長方形となっている。

なお、柱の内側の面積は、当初が約7.1m<sup>2</sup>、第2段階が約9.7m<sup>2</sup>、最終段階が約9.6m<sup>2</sup>となり、当初から第2段階となる際には面積が増加しているが、第2段階と最終段階の面積はほとんど変わらない。1回目は増築、2回目は柱の位置を変更するための改築ではないかと考える。

炉は全体で東西方向に1.16m、南北方向は東側で0.63m、西側で0.82mを測る。東側の炉は南北に長い楕円形を呈するものと考えられ、最上部のにぶい赤褐色土は1.5~4cmの厚さで、非常に固くしまっている。西側の炉は円形を呈するものと考えられ、最上部のにぶい赤褐色土は厚さ1.5~2cmで、非常に固くしまっている。西側の炉の方が大きく、一段高く作られている。住居が西へ拡張するのに伴い、炉も西へ移動し

ていったと考えられる。

住居跡の平面プランも柱の移動に伴い変更していることが想定されるが、プラン変更の痕跡を確認することはできなかった。

住居跡内からは弥生時代後期の土器が出土している。

なお、SB01の北側、B・C - 4 区にかけて浅い窪みが検出されている。南北方向に3.42m以上、東西方向に3.14m以上の規模で、隣接する住居跡とも考えたが、それに伴う遺構や遺物の検出はなく、詳細は不明である。

## ② 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は2軒確認された。

### SH01（第9図）

B - 4・5 区にかけて検出された。SP05・06・07・10で構成される3間の柱列として検出された。SP05・10間の距離は6.54mで、A-A'の方位はN-8°-Wを測る。柱穴同士の距離は、SP05・06間で1.94m、SP06・07間で2.35m、SP07・10間で2.30mであり、北側の距離が短くなっている。柱穴の直径はすべて80cm前後で底の標高は、SP05が他のSPと比較して少し浅くなっている。

平成元年度に本調査区の東隣で実施された発掘調査では、今回の柱列に対応する3間の柱列が検出されており、合わせて梁間1間、桁行3間の建物跡になる。柱穴間の距離は北側が2.30m、中間が2.00m、南側が2.30mとなっており、SH01と異なり中間の距離が短くなっている。建物の規模は20×6.5mになると考えられる。

図化できる遺物の出土はなかった。

### SH02（第10図）

B - 6・7 区にかけて検出された。SP42・43・44・45・46・47で構成される、梁間1間、桁行2間の建物跡である。建物の規模は3.98m×3.74mで、南北に若干長い長方形を呈す。長軸の方位はN-5°-Eを測る。柱穴同士の距離はSP44・47間で3.68m、SP42・46間で3.74m、SP44・43間が1.86m、SP43・42間が2.10m、SP47・45間が1.88m、SP45・46間が2.10mとなり、桁行の北側が少し短くなっている。柱穴の直径はSP47、46が若干小さく50cm台、残りの4つは80cm台であった。SP46のみ、少し浅く掘られ、また、SF16により切られていた。

SH02を構成するすべての柱穴から弥生時代後期の土器が出土している。

## ③ 方形周溝墓

3基が検出されているが、いずれも周溝のみで主体部は確認できなかった。

**SD04（第11図）**

C - 9 ~ 11、D - 9、E - 9・11区にかけて検出された。規模は周溝の外側で最大11.7m、内側で8.32m、第35次調査で検出された周溝墓の中では最大規模である。A - A'軸の方位はN - 38° - Wを測る。C - 10区、D - 9区、E - 10区に角があり、ほぼ正方形と考えられる。南の角は調査区域外のため確認できなかったが、D - 11区内に想定される。

周溝の幅は検出面で1.2~1.8m、下端で0.4~1.2mを測る。底の標高は49m前後となっており、検出面からの深さは0.2~0.3mである。土層の観察からSD03より先に作られていることが確認できた。弥生時代後期の土器片が出土した。

**SD07、08（第12図）**

B - 8・9、C - 8・9区にかけて検出された。検出時には搅乱の影響で別々の遺構と考え、北側と南側とで分けていたが、一つの遺構として考える。規模は周溝の外側で最大8.25m、内側で6.74m、B - B'軸の方位はN - 44° - Wを測る。B - 8区、B - 9区、C - 8・9区の境に角が来ている。東の角は今回の調査では確認できなかったが、平成元年度調査で周溝に続く部分が検出されており、ほぼ全周している。周溝は南の角部分で浅くなり、検出面では繋がっていない。形状は四角形だが、南東方向にわずかに開く。

周溝の幅は検出面で0.4~1.0m、下端で0.2~0.5mを測り、底の標高は49.4m前後となっている。検出面からの深さは0.1~0.2mである。土層の観察から、SD06よりは古く作られていることが確認できたが、SD05との関係は確認できていない。

弥生時代後期の土器片が出土している。

**SD09（第13図）**

C - 7・8、D - 7~9、E - 7~9区にかけて検出された。規模は周溝外側で最大10.1m、内側で7.42m、A - A'軸の方位はN - 28° - Wを測る。C - 8区、D - 7区、E - 7区、E - 9区に角があり、正方形を呈す。周溝は南東と南西の角の2ヶ所で浅くなり、検出面では繋がっていない。周溝の幅は検出面で0.7~1.9m、下端で0.4~1.3mを測り、底の標高は49m前後となっている。検出面からの深さは0.3~0.4mである。

土器の出土が最も多かった方形周溝墓で、弥生時代後期の土器が出土している。

**④ 溝状遺構**

遺構の略号はSDであるが、方形周溝墓の周溝でないものを以下に記載する。

**SD02、05（第14図）**

SD02はB - 10・11区、SD05はB - 9・10区で検出された。平成元年度の調査結果と照合した結果、一続きの遺構であることが判明した。溝は西側で浅くなり全周していないが、円形になると考えられる。平成元年度調査でも指摘されているように、小

円墳の周溝の可能性が高い。推定される直径は溝外側で5.9m、内側で4.8mである。溝の幅は検出面で0.5~0.8m、下端で0.3~0.4m、底の標高は49.2m前後である。

SD05・06・07が交差する部分から須恵器片が出土している。平成元年度調査では須恵器壺の頸部が出土している。

#### SD03、10（第6、14図）

検出時には搅乱と切合いの影響で、別々の遺構と考えていたが、調査の結果、一つの遺構として考える。B-10区からE-9区まで東西方向に延びており、E-9区南西で北へほぼ直角に曲がり、F-7区で終了している。土層の観察からSD04よりは新しいものと考えるが、時代を判別できる遺物の出土が無いため、詳細は不明である。

平成元年度調査で続く部分を検出しており、SD03の東端から東へ約5mのところで直角に北へ曲がり、約20m北上し東に向きを変えている。当時の調査でも、礫が集中して検出された以外に遺物の出土はなく、時期等は不明である。土の堆積状況から遺状遺構ではないかと推察されている。

#### SD06（第6図）

B・C-9区で検出された。調査区東壁から始まり、SD03とほぼ並行に東西方向に延びる。SD04に突き当たり途絶えている。やはり平成元年度調査において続きの部分が検出されている。他の遺構との切合いは搅乱がひどく確認できなかった。

#### ⑤ 土坑墓（第15図）

5基検出された。

#### SF02

D-2、E-2区にかけて検出された。検出面で長軸2.36m、短軸0.72m、下端で長軸2.23m、短軸0.66mである。検出面からの深さは0.22~0.24mである。長軸の方位はN-73°-Wを測る。平面プランは長方形を呈し、土坑はほぼ垂直に掘り込まれておらず、底はほぼ平坦になっていた。一部検出面まで耕作による搅乱を受けている。土坑南西部分から蛇行剣、鎌、刀子がまとめて出土した。

#### SF03

D-3区の北東で検出された。東側半分が壊されている。長軸の方位は座標軸とは同じで、検出面で長軸1.43m、下端で1.27mである。短軸の長さは推測であるが、検出面で0.6m程度、下端で0.4m程度になると考えられる。平面プランは長方形と推測される。土坑はほぼ垂直に掘り込まれ、底部は平坦で、検出面からの深さは0.14~0.17mであった。鉄剣が底部で、鉄鏃が底から約8cm上で出土した。

**SF04**

E・F-2区にかけて検出された。検出面で長軸1.82m、短軸0.53mで、下端で長軸1.33m、短軸0.34mとなっている。長軸の方位はN-53°-Wを測る。平面プランはいびつな長方形を呈し、土坑は長軸北西側が緩やかな傾斜で掘り込まれている。底部は南西方向に傾斜していた。検出面からの深さは0.23~0.30m、底から4~10cm上で、直径2~10cm大の礫が敷き詰められていた。

**SF06**

E-4区内西側で検出された。検出面で長軸2.11m、短軸0.58m、下端で長軸1.98m、短軸0.50mである。長軸の方位はN-21°-Wを測る。平面プランは、長軸方向で南に向い若干細くなり、南端は丸味を帯びている。土坑はほぼ垂直に掘り込まれ、底部は平坦で、検出面からの深さは0.22~0.28mであった。鉄鎌、刀子、錐、鍔などの鉄製品と砥石が出土した。

**SF08**

D-5区内北側で検出された。検出面で長軸1.25m、短軸0.48m、下端で長軸1.03m、短軸0.37mである。長軸の方位は、N-19°-Eを測る。平面プランは楕円形を呈し、土坑はやや傾斜をつけて掘り込まれており、底部はほぼ平坦であった。検出面からの深さは0.19~0.24mであった。刀子が出土している。

**⑥ 近世土坑墓（第16図）**

江戸時代の近世土坑墓は2基検出された。

**SF14**

B-8区で検出された。検出面で長軸0.97m、短軸0.56m、下端で長軸0.71m、短軸0.44mである。長軸の方位は座標軸とはほぼ並行であった。平面プランは長方形を呈し、検出面からの深さは、0.36~0.40m、土坑はほぼ垂直に掘り込まれていた。覆土には骨片と炭が含まれており、この場で茶毬に付し、埋葬されたと考えられる。底から20cm程上で径10~30cm大の石が敷かれていた。

**SF16**

B-7区で検出された。検出面で長軸1.18m、短軸0.85m、下端で長軸0.84m、短軸0.62mである。長軸の方位はN-17°-Wを測る。平面プランは長方形を呈し、南東の角はSH02を構成するSP46と切合っていた。検出面からの深さは0.19~0.21m土坑は傾斜をつけて掘り込まれており、底部はほぼ平坦であった。かわらけ、寛永通寶が出土している。内部の土には骨片、炭が含まれ、かわらけにも煤が付着していたことから、SF14同様にこの場で茶毬に付され、埋葬されたと考えられる。

## (2) 遺物

弥生時代後期の土器、古墳時代の鉄製品などが出土した。

### ① 土器（第17・18・19・20・21図）

土器は主に弥生時代後期の土器が出土している。過去の改植のためか、小破片で出土したものが多く、接合し固化できたものを示す。

第17図1～9はSB01から出土した。

1は壺で、口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部で1/4、頸部で1/2程度残存していた。SB01北西部で出土した。口径は18.4cm、胎土には径0.5mm大の石がわずかに含まれている。口縁部外側には刷毛目調整が施され、頸部から肩部にかけて横波状文が施されている。口縁部内側は摩滅しているが、一部横波状文が認められる。頸部内側に指頭圧痕が認められ、頸部と胴部の接続部分は調整が甘く、粘土帶の接合部分が突出している。

2は壺の口縁部の破片で、SB01北東部分で出土した。推定口径は約18cmである。外側、内側ともに摩滅しており、調整等は不明である。

3は折り返し口縁壺の口縁部小破片で、口唇部に繩文が施されている。SB01南東部分から出土した。

4は台付壺の口縁から胴部で、約1/3残存していた。SB01北西の床直上で出土した。口径は17.8cm、最大径は19.6cmを測る。胎土に直径2～5mm大の石が含まれている。口唇部に刻み目が施され、口縁部から胴部の外側に縱方向の刷毛目調整が施されている。口縁部内側には横方向の刷毛目調整が施され、胴部内側は摩滅しているが、ナデ調整がわずかに認められる。

5は壺胴部の小破片で外側に繩文が施され、内側は摩滅している。覆土からの出土である。

6は台付壺の接合部及び脚台部で、SB01北東の床直上で出土した。底径9.8cm、残存高は6.5cmである。外側、内側ともに摩滅しているが、刷毛目調整が認められる。

7は壺の胴部下半部から底部にかけての破片である。SB01北東部の覆土から出土した。胴部は摩滅しており、一部ミガキが認められるが詳細は不明である。底部の立ち上がり部分に縱方向の刷毛目調整が施されている。内側は横方向の刷毛目調整が施され、一部ナデ調整の痕跡が認められる。

8は台付壺の脚台部約1/4の破片で、炉の上から出土した。胎土に砂が多く含まれている。推定底径は8.8cm、残存高は4.3cmである。外側に縱方向の刷毛目調整が施されている。内側は右下がりの刷毛目調整が施され、上部は太く、粗い刷毛目、下部は細く細かい刷毛目となっている。

9は台付壺脚台部約1/8の破片である。SB01北西部から出土した。8同様胎土に砂を多く含む。推定底径は11.2cm、残存高は3.5cm、外側に縱方向の刷毛目調整、内側に横方向の刷毛目調整が施されている。

第18図10～19はSH02から出土した。

10は壺で口縁部以外がほぼ残存している。SP47から出土した。最大径23.8cm、底径9.8cm、残存器高23.8cm。胎土には径1～5mm大の石、褐色の粒子が含まれる。頸部に櫛描縦状文が、肩部から胴部にかかる部分には結節縄文が施されている。胴部から底部にかけては摩滅、剥離が著しいが、刷毛目調整の痕がわずかに認められる。内側の底部近くには横方向の刷毛目調整が施されている。

11は壺の口縁部、約1/5の破片で、SP45から出土した。胎土に径1mm大の石、雲母がわずかに含まれている。外側に粗い刷毛目調整が施されている。内側は摩滅しているが、一部結節縄文が認められる。

12は壺の頸部、約2/5の破片で、SP46から出土した。外側に一部刷毛目調整が認められるが、外側、内側とともに摩滅が著しく、調整等の詳細は不明である。

13は壺の胴部で、SP47から出土した。約1/5が残存している。胎土に径1～2mm大の褐色の石を多く含む。最大径は18.3cm。胴部上方に櫛刺突羽状文が施され、その下から胴部下方にかけてミガキ調整が施されている。

14は折り返し口縁壺の口縁部小破片で、SP47から出土した。口唇部上方に横方向の刷毛目調整、下方に刻み目が施されている。口縁部外側に縦方向の刷毛目調整が施されている。

15は壺もしくは壺の頸部と考えられる小破片で、SP44から出土した。胎土に径1mm大の石が含まれている。外側には縦方向、内側には横方向の刷毛目調整が施されている。

16は壺頸部、約1/4の破片で、SP47から出土した。胎土に径1～2mm大石、褐色の粒子が含まれている。最大径は25.2cmである。外側は、刷毛目調整の後、ミガキが施されている。内側は摩滅しており、一部に横方向の刷毛目調整が認められる。

17は壺頸部の小破片で、SP42から出土した。頸部中央部であり、上半部にかけては縄文が、下半部にかけてはミガキ調整が施されている。

18は壺頸部の小破片で、SP43から出土した。外側に刷毛目調整が施されている。

19は壺頸部の小破片で、SP42から出土した。17と同一個体と考えている。外側に縄文が施されている。

第19図の20は縄文時代中期の深鉢の破片で、C-10区、SD03・04が交差する部分から出土した。胎土に白色の粒子が含まれ、粘土紐貼り付けによる懸垂文の一部が認められる。SD03・04交差部分からの出土であるが、SD04は方形周溝墓の周溝であり、SD03はそれよりも新しいものであるため、流れ込みの遺物と考える。

第19図21～23はSD04から出土した。

21は折り返し口縁壺の口縁部小破片である。周溝南東部から出土した。口唇部に刻み目、外側には縦方向の刷毛目調整、内側には羽状縄文が施されている。

22は高壙の壊部と脚部の接合部分で、周溝南東部、調査区の南端で出土した。胎土

に径1～3mmの石が多く含まれている。脚部に円形の透かし孔があり、三方に空けられていたと考えられる。

23は壺もしくは鉢の口縁部の破片で、周溝北東部から出土した。推定口径25.7cm。胎土に径1mmの石をわずかに含んでいる。口縁部は、口唇部に刻み目を施し、その下に横方向の沈線を引き、右下がりの刷毛目調整が頸部まで施されている。内側は刷毛目調整の後、ミガキが施されている。

第19図24は須恵器壺蓋の口縁部小破片で、B-9区、SD05・06・07が交差する部分から出土した。小円墳の周溝と考えられるSD05に伴うものと考えている。

第19図25～27はSD08から出土した。

25は壺の口縁部の小破片で覆土中からの出土である。口縁部内側に櫛描波状文が施されている。摩滅が著しいが、折り返し口縁と思われる。

26は壺の口縁部の小破片で、B-8区、周溝北部で出土した。推定口径は17.6cm。外側に綫方向の刷毛目が施されている。内側は頸部付近で横方向の刷毛目と思われる痕が認められる。

27は壺の胴部、約1/5の破片で、B-8区、周溝北部で出土した。推定最大径は約14cmである。外側内側とも摩滅が著しく、調整等は不明である。

第19図28～32、第20図33～51はSD09からの出土である。

28は壺の口縁部から胴部で、約1/2が残存している。口唇部は欠損している。胎土に径1～3mmの石を含む。最大径は24.6cm。周溝南部で検出された。外側は腹部に綫方向の刷毛目調整が施され、頸部から肩部にかけて結節繩文が施されている。胴部中央部から下半部にかけて刷毛日の後、ミガキが施されている。内側は胴部中央部で範削り調整、指頭圧痕が認められ、底部近くでは横方向の刷毛目調整が施されていた。口縁部内側、胴部外側上方に赤彩がわずかに残る。

29は壺の口縁部から頸部で、周溝東部から出土した。口径は13.6cmである。口縁部に綫方向の刷毛目、頸部に横方向の刷毛目調整が施され、頸部から肩部にかけて繩文が施されている。肩部から胴部にかけては刷毛目調整が施されていたと思われるわずかな痕跡が残る。

30は壺の頸部約1/4の破片である。周溝の南東角近くで出土した。胎土に径1mm大の石をわずかに含んでいる。外側には綫方向の刷毛目調整が、内側には櫛描簾状文が施されている。

31は壺の肩部の小破片で、周溝の北東角近くで出土した。胎土に径1～3mm大の石を多く含んでいる。外側には繩文が施されている。

32は壺の胴部の破片で、約1/4が残存していた。周溝の北東角近くで出土した。胎土に径1mm大の石を多く含んでいる。外側に一部刷毛目調整のような痕跡が認められるが、摩滅が著しく、詳細は不明である。

33は壺で、口縁部から頸部にかけて欠損している。最大径は12.8cm、底径は3.9cmで

ある。胎土に径1~3mmの大石、褐色の粒子を多く含んでいる。周溝の南東角近くで出土した。胴部上半部は縦方向の刷毛目調整の後、ミガキが施されている。中央部から下半部にかけては摩滅している。胴中央部に黒斑がある。

34は壺の底部で、周溝北東の角から出土した。底径は8.6cm、胎土に径1~2mmの大石、褐色の粒子が含まれている。底部外側に刷毛目調整が施され、箆ナデと思われる痕が認められる。

35は壺の底部で、周溝東部で出土した。底径6.8cm、胎土に径1~2mmの大石を多く含んでいる。底部外側に縦方向の刷毛目調整が施されている。

36は壺の口縁部小破片で、周溝西部から出土した。推定口径は18.4cm、胎土に径1mm大の石をわずかに含んでいる。口唇部上方に横方向の刷毛目調整が施され、下方には刻み日がある。外側は頸部にかけて縦方向の刷毛目調整が施されており、内側は横方向の刷毛目調整が施されている。

37は壺の底部約1/5の破片で、周溝の南東角近くから出土した。底径は5.4cm、胎土に径1mm大の石がわずかに含まれている。内側に箆削り調整と思われる痕跡が認められる。

38は壺の口縁部から頸部にかけての小破片で、周溝の南部で出土した。推定口径は16cm、胎土には径1mm大の石を多く含む。外側は右下がり、内側は横方向の刷毛目調整が施されている。

39は壺の底部で、周溝南東角の近くから出土した。底径5.4cm、胎土に径1~2mmの大石がわずかに含まれる。摩滅が著しく、調整等の詳細は不明である。

40は高坏の坏部と脚部の接合部分で、胎土に径1mm大の石をわずかに含む。坏部内側にミガキ調整、脚部内側に箆削り調整が施されている。出土地点はSD04・09が接する部分で、双方を切る攪乱土からの出土のため、実際にはどちらに属するかは不明である。

41は小壺の壺の口縁部から胴部にかけての破片である。周溝東部から出土した。口径8.4cm、最大径9.1cmで、胎土に径1mm大の石を含む。外側は刷毛目調整の後、ミガキが施されている。内側は横方向の刷毛目調整が施されている。

42は片口の鉢と思われる口縁部の破片で、周溝北部で出土した。胎土に径1mm大の石を含む。口唇部に横方向の刷毛目調整が施され、その下方はナデ調整が施されている。頸部に向い右下がりの刷毛目調整が施されている。内側には横方向の刷毛目調整が施されている。

43は高坏の坏部と脚部の接合部分で、胎土に径1~3mmの大石を含んでいる。40と同じく、SD04・09の接点で出土した。調整等は不明、脚部に円形の透かし孔が三方に空けられている。

44~47は壺の胴部の小破片で、同一個体のものと考えられる。周溝南東の角近くで出土した。胎土に径1~2mmの大石を含んでいる。外側には結節繩文が施され、内側にはナデ調整が施されている。

48は壺の胴部の小破片で、周溝覆土から出土した。胎土に径1mm大の石をわずかに

含み、竈攝羽状文が施されている。

49は壺の胴部の小破片で、周溝の北東角近くで出土した。胎土に径1mm大の石を含み、櫛刺突羽状文が施されている。

50は壺の胴部の破片で、周溝の南東角近くで出土した。胎土に径1mm大の石をわずかに含み、外側には羽状繩文が施され、内側にはナデ調整の痕跡が認められる。

51は壺の胴部と思われる小破片で、周溝北東の角近くで出土した。胎土に径1mm大の石を含み、外側に刷毛目調整が施されている。

SF02の覆土中から第21図52、53が出土した。土器が含まれていた土層は耕作による擾乱層であったため、流れ込みの遺物と考える。

52は折り返し口縁壺の口縁部である。口径は21.2cm、胎土に径1~2mm大の石が多く含まれる。外側は頸部にかけて縦方向の刷毛目調整が施されている。口縁部内側に繩文のわずかな痕跡が認められる。頸部にかけて櫛攝縫状文、横方向の刷毛目調整が施されている。

53は壺の底部の破片で、底径7.2cm、胎土に径1~3mm大の石を含んでいる。外側は縦方向の刷毛目調整、内側は横方向の刷毛目調整が施されている。

その他遺構外からは、第21図63、64が出土した。

63は折り返し口縁壺の口縁部から頸部で、口径は15.0cmである。口縁部外側は縦方向の刷毛目調整が施され、刷毛目の下端及びそこから5mm程上の2ヶ所に沈線が引かれている。沈線間の刷毛目はナデで消されている。頸部にはミガキ調整が施されており、赤彩が残る。口唇部上方から内側にかけて繩文が施され、頸部にかかるあたりで横方向の刷毛目調整が施されている、頸部の内側にはナデ調整の痕跡が認められる。

64は壺の胴部の小破片で、羽状繩文が施されている。63、64はD-5区から出土している。

## ② 鉄製品（第22・23図）

土坑墓（SF）から鎌、刀子、剣、鉄錠、鉄鐸などの鉄製品が出土した。

SF02から、第23図65、第23図67、78が出土した。

65は蛇行剣で、剣先から茎部まで完全に残存し、2回の屈曲が確認できる。全長53.7cm、剣身の長さが41.2cm、最大幅3.0cm、厚さは剣先近くで0.2cm、中程で0.4cm、茎部近くで0.5cmである。茎部の長さは12.5cm、最大幅2.6cm、厚さは0.3cmである。闇は両闇だが、片方は浅く斜めに切り込まれているが、もう片方は緩やかに湾曲している。目釘孔は2孔あり、直径は0.3cm、闇からの距離は8cmと11.2cmである。下の孔には目釘が残存し、目釘は鉄製で、長さは1.5cm、直径0.3cmである。剣身に残存する木質は、木目が主軸方向に観察できるため鞘と考えられる。茎部に残る木質は柄であり、上から纖維が交差するように巻き付けられているため、柄と茎の接続方法ははっきりしない。

蛇行剣はその形状から実用的な道具ではなく、祭祀的な意味合いが強い道具と考えられている。屈曲が2回と少なく、蛇行剣の最終形態の頃と考えられ、5世紀後半頃に比定される。

67は刀子で、刃先から茎部まで完全に残存していた。全長14.0cm、刃部の長さ9.3cm、茎部4.7cmである。幅は刃部で最大1.7cm、茎部で1.4cmである。茎部に付着する木質の観察から、柄材をU字状に彫り込み刀身をはめ、その上から別材で塞ぐ、落としこみ技法で制作されていることが判る。茎部には樹皮が巻かれている。

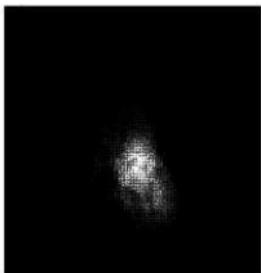
78は鎌で、全長18.3cm、最大幅4.2cm、刃部、背部共にほぼ直線をなし、先端近くで刃部側に緩やかに曲がっている。先端を左に向け、刃部を手前に来るよう置くと基部は上に折り返されている。折り返しと反対側に木質が残存し、柄の痕跡と考えられる。想定される柄と刃部との角度は約120°の鈍角をなす。

65、67、78はすべてSF02南西部からまとめて出土した。

SF03から、第22図66、第23図79が出土した。

66は劍で、劍先が欠損している。耕作により破壊されていたSF03東半分の底から出土した。残存長58.3cm、劍身の長さは47.7cm、最大幅3.1cm、厚さは劍先近くで0.4cm、中程で0.5cm、茎部近くで0.5cmである。茎部の長さは10.6cm、最大幅は2.5cm、厚さは0.3cmである。両闇で、目釘孔は2孔あり、直径は0.3cm、闇からの距離は5.9cmと9.9cmである。劍身には木質が残存しており、精入りの鐵劍であったと思われる。

79は鉄鐸で、SF03の覆土中から出土した。残存長4.0cmの円錐形をしている。直径は中央で1.1cm、裾部で1.6cm、厚さは0.1cmである。扇形の鐵板を曲げて作られており、表面に布、革と思われるものが付着している。袋に入れられていたか、周辺に置かれたものが付着したものと考えられる。槍などの石突や円錐状の刺突具の可能性も考えられるが、石突と比べ肉厚が薄く、刺突具と比べても先端からの角度が広いこと、また、X線写真では先端に穴が開いているように見えるため、鉄鐸として報告したい。鉄鐸は古墳時代中期から後期の古墳からの出土例が多い。



鉄鐸X線写真

第23図68、71~77はSF06からの出土である。

68は刀子で、ほぼ完全に残存していた。全長は8.1cm、刃部の長さ5.6cm、茎部の長さ2.5cm、幅は刃部で1.3cm、茎部で0.8cm、厚みは刃部で0.3cm、茎部で0.2cmである。茎と峰に木質が付着している。

71は長頸の腸抉長三角形の鐵鎌である。残存長15.0cm、刃部の長さ6.5cm、頸部の長さ9.5cm、茎部の長さ4.4cm、幅は刃部で最大3.2cm、頸部で0.5cm、茎部で0.3cmである。刃部は片面が平坦な片丸造りで、長い逆刺が作られている。逆刺の先端は二段になつ

ているが、片側が欠損している。関は木質で判りにくいが、両関と考えている。

72は短茎または無茎の腸扶長三角形の鉄鎌である。残存長7.0cm、刃部の長さ6.2cm、最大幅は3.3cm、鎌身を挟んでいた矢柄が残存しており、茎の様子は確認できない。鎌身を挟む形で接合する場合、鎌身に孔を空け、糸を通して縛るが、糸の痕跡は認められるが、孔は確認できず、形状や数は不明である。矢柄の長さは表裏で約1cm違っている。逆刺の部分は両側とも欠損しているが、二重の逆刺の痕跡が認められる。

73は短茎または無茎の腸扶三角形の鉄鎌である。残存長は4.4cm、刃部の長さは3.7cm、推定される最大幅は3.4cmである。72同様に矢柄が残存しており、茎の様子は確認できない。鎌身に空けられた孔の形状、数も不明である。逆刺の部分は片側が欠損しているが、短い二段の逆刺である。

74・75は同一個体と思われるが、用途不明の棒状鉄製品である。

74は残存長7.3cm、幅0.7cm、厚さ0.2cmである。岡の上方でくの字に曲がる。

75は残存長5.3cm、幅0.7cm、厚さ0.2cmである。SF06では後述するように工具が出土しているので、何らかの工具である可能性も考えられる。

76は鎌で、刃先が欠損しているが、鎌がわずかに認められる。残存長は13.6cm、刃部の残存長は0.9cm、頭部の長さは11.1cm、茎部の長さは1.6cmである。両関で長い頭部を持つが、刃部近くまで木質の柄で挟み、紐状のものを巻いて固定している。

77は鎌で、先端が欠損している。残存長は17.7cm、断面形は先端から中程まで四角形、基部に近づくにつれ丸みを帯び、基部では円形になっている。基部は袋状で柄を差し込むようになっている。幅は0.4cm、基部で直径1.1cm。基部の外側に付着する木質から、そのままで持ち運ぶ時などに危険なため、鞘のようなものがあったと考えられる。

70は刀子で、SF08から出土した。刃部をほぼ欠損しており、残存長4.7cm、茎部の長さ3.4cm、最大幅は1.4cmである。

遺構外から69、80~82が出土している。

69は刀子で、刃部先端が欠損している。残存長は7.3cm、刃部の残存長4.3cm、茎部の長さ3.0cm、幅は刃部で1.1cm、茎部で0.9cmである。

80は残存長3.5cm、幅0.7cm、断面は四角形を呈する。

81は残存長5.0cm、幅0.6cm、断面は四角形を呈する。

82は残存長4.8cm、幅0.6cm、断面は上方でいびつな円形、下方で四角形を呈する。木質が付着している。

80~82は鉄鎌の茎部ではないかと考えている。

### ③ 砥石（第21図）

SF06から54、55の2点が出土している。

54は灰白色を呈し、残存長8.1cm、最大幅は2.8cm、最小幅は1.4cm。側面が緩やかに内湾する四角柱で、断面は正方形を呈す。岡上における上部、下部ともに欠損してい

ると考える。側面の四面はすべて使用され、表面は非常に滑らかである。

55は灰白色を呈し、一部欠損しているがほぼ完品である。長さ4.6cm、幅3.5cm、形状はいびつな四角形で、断面は角が2ヶ所削られているため、不整形な六角形を呈している。側面の内、表面が非常に滑らかな三面が使用されたと考えられる。残りの側面と上面及び下面は表面が少しづつ削られており、研ぎに使用されてはいないが形を整えた痕と考えられる。上面に4ヶ所、下面に2ヶ所孔が認められ、上面の一つは反対側まで貫通している。孔は石の内側に向かってわずかに細くなっているため、細く尖ったものを抜いた痕ではないかと考えている。

#### ④ その他の遺物（第21図）

SF16から出土した。

56～60はかわらけで、内56～59は完型である。いずれも辘轳を使用して形成されており、底部には回転糸切り痕が残っている。

56は口径10.8cm、底径4.8cm、器高3.2cmで、内側に煤が付着している。

57は口径9.5cm、底径4.4cm、器高3.5cmで、内側、外側に煤が付着している。辘轳から切り離された後、調整が加えられている。

58は口径8.7cm、底径3.7cm、器高2.8cmである。

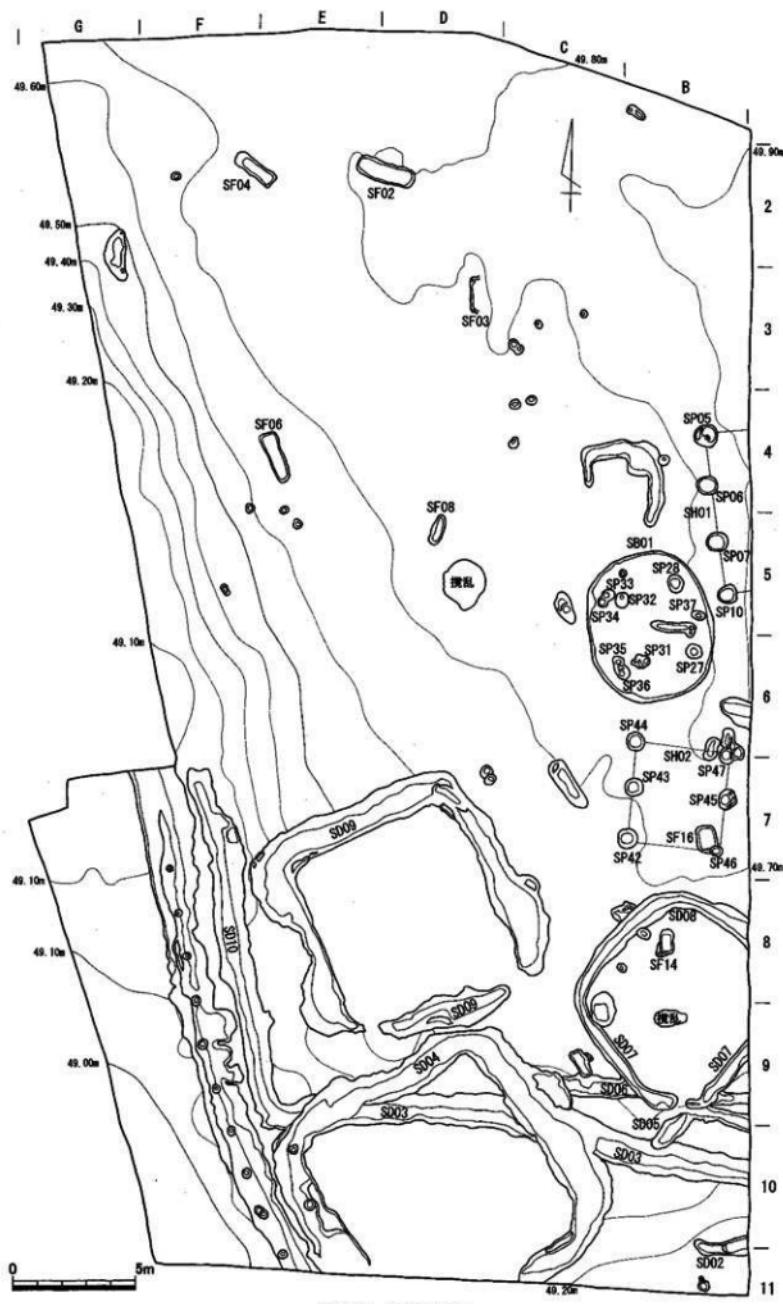
59は口径8.9cm、底径4.0cm、器高2.9cmである。

60はかわらけ口縁部の小破片で、推定口径は9.8cmである。

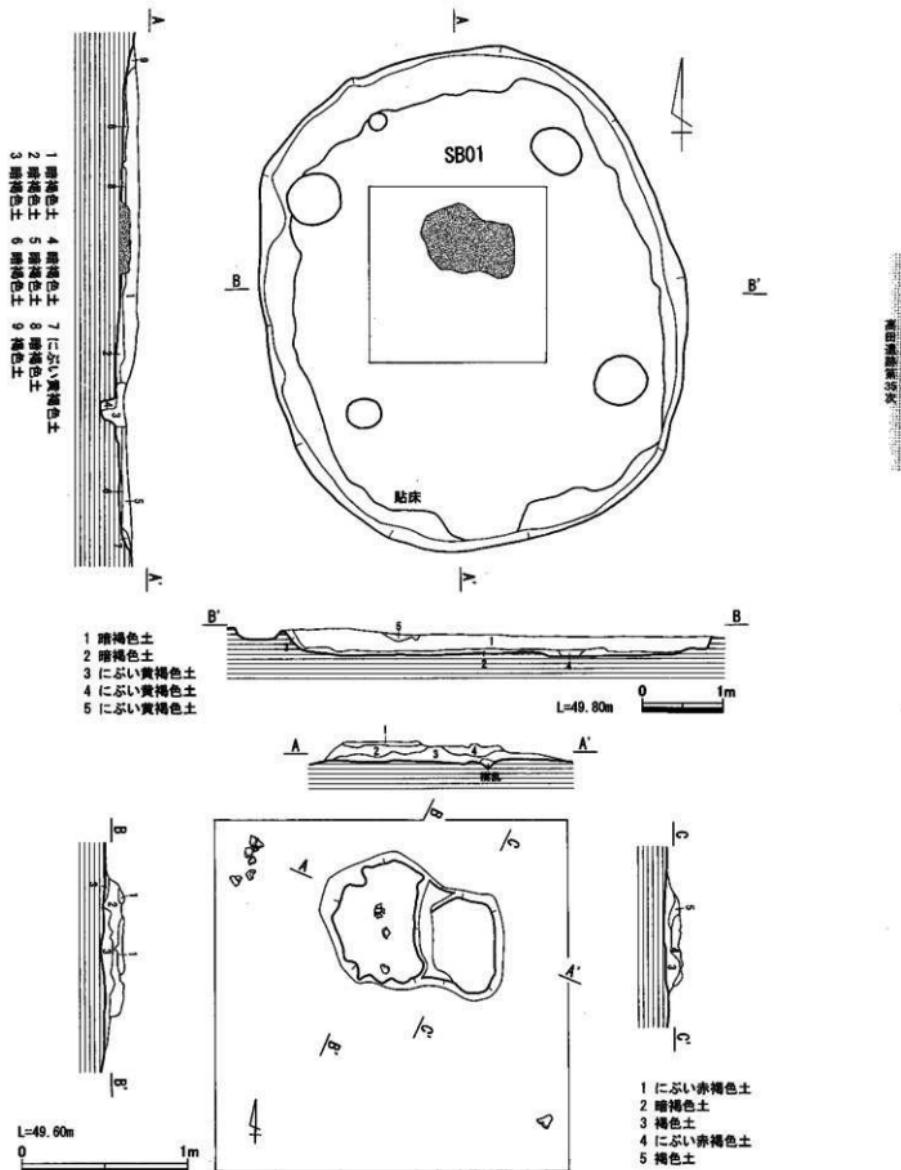
61、62は寛永通寶である。61は完型品で、直径2.4cm、厚さ0.2cmである。

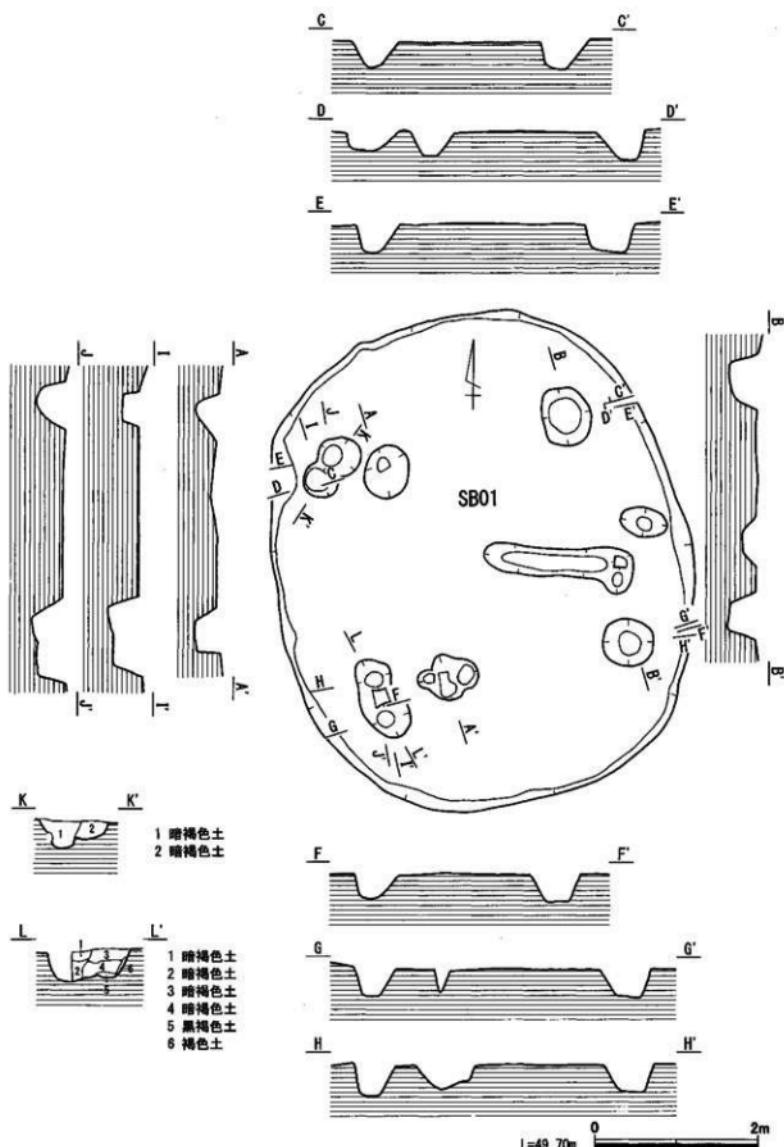
62は約3/5の破片である。直径は推定で2.4cm、厚さは0.2cmである。61、62とともに裏面に文様等は無い。

その他、掘削土中から中近世の陶器と考えられる遺物が出土しているが、小破片など、遺構に伴わないので、詳細は不明である。

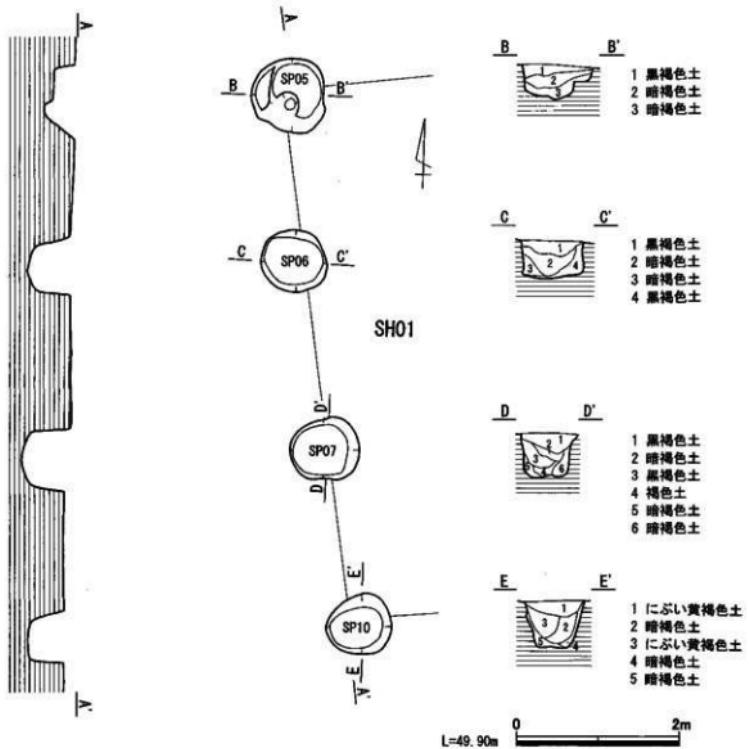


第6図 遺構全体図

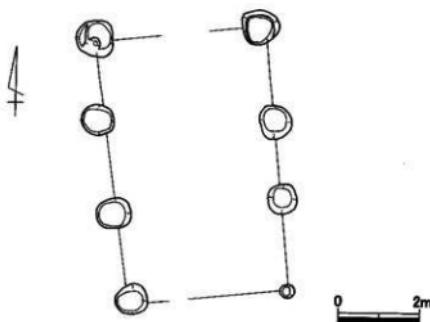




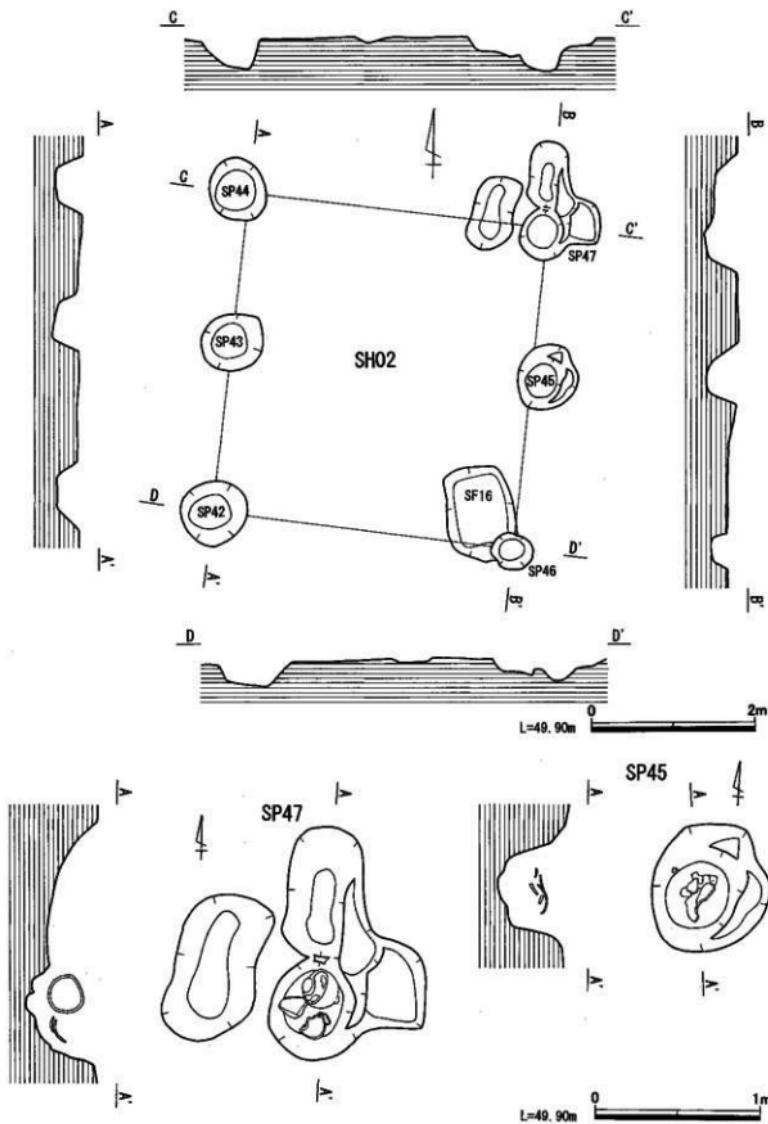
第8図 SB01実測図 (2)



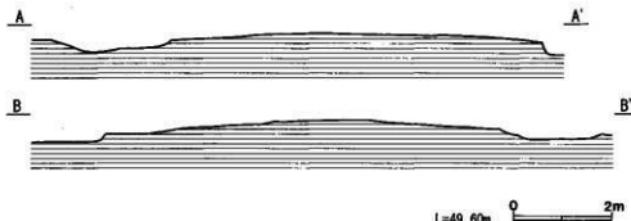
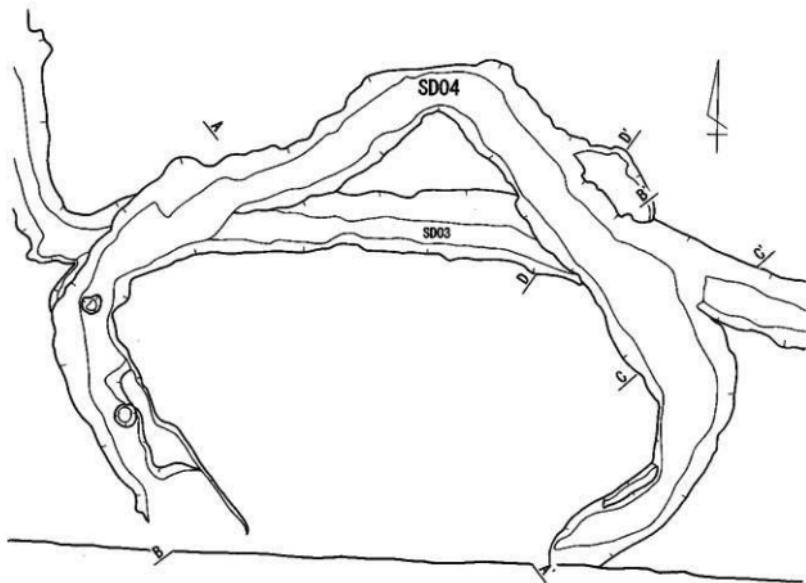
**高田35次調査 平成元年度調査**



第9図 SH01実測図



第10図 SH02実測図



L=49.60m 0 2m

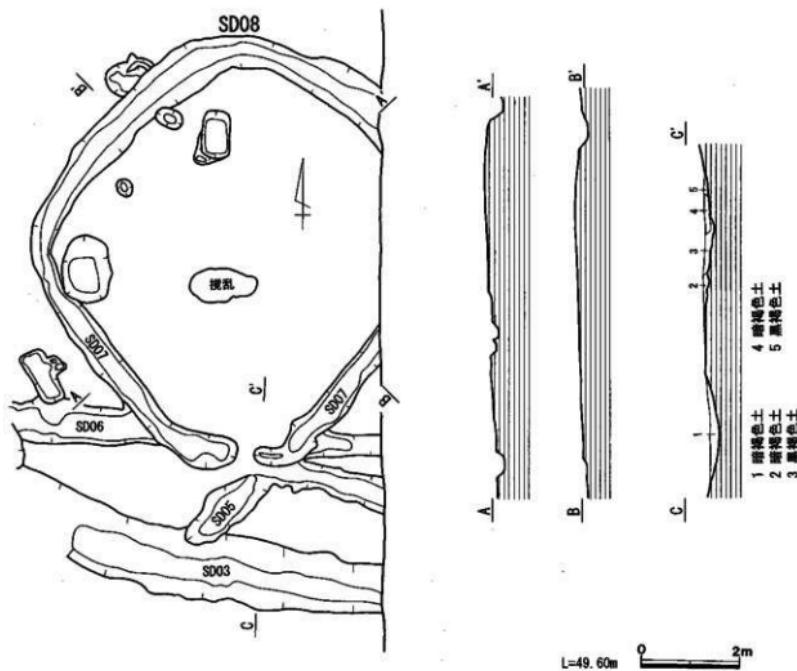


- 1 黒褐色土
- 2 黄褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 黑褐色土

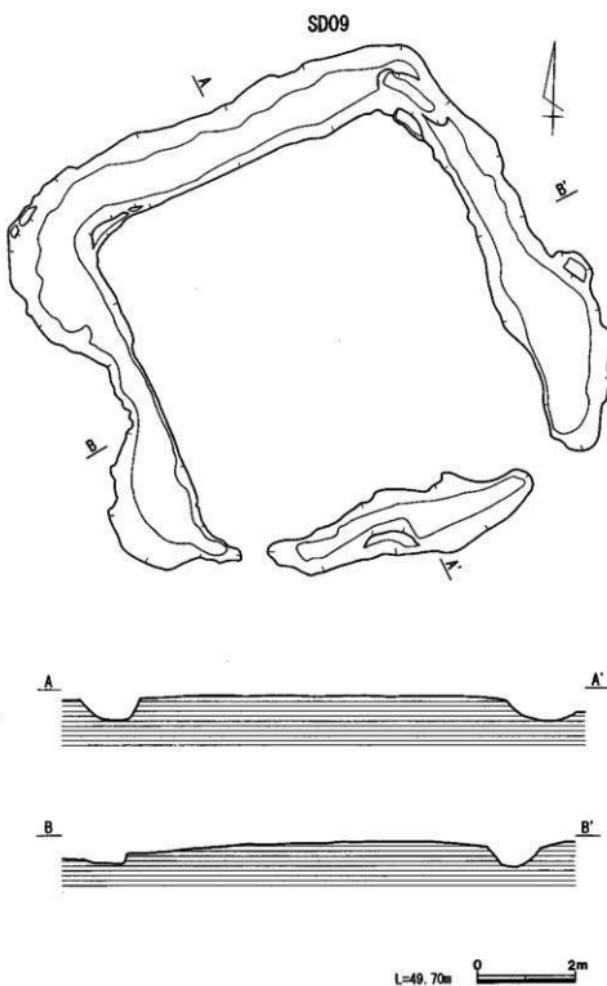
- 1 暗褐色土
- 2 黑褐色土
- 3 棕褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 暗褐色土
- 6 暗褐色土
- 7 暗褐色土
- 8 棕褐色土
- 9 暗褐色土

L=49.60m 0 2m

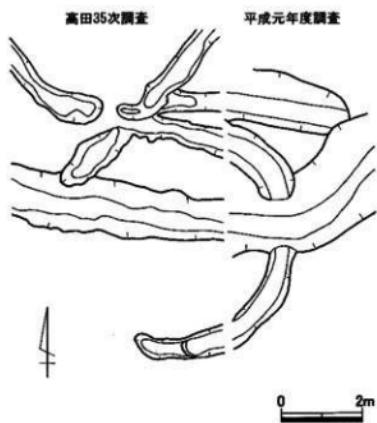
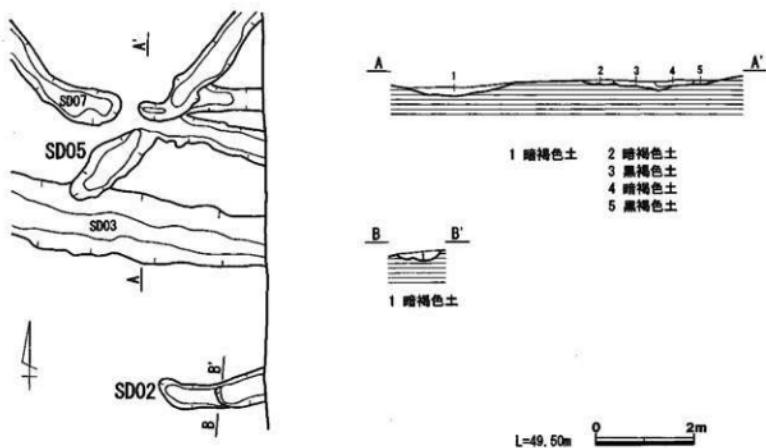
第11図 SD04実測図



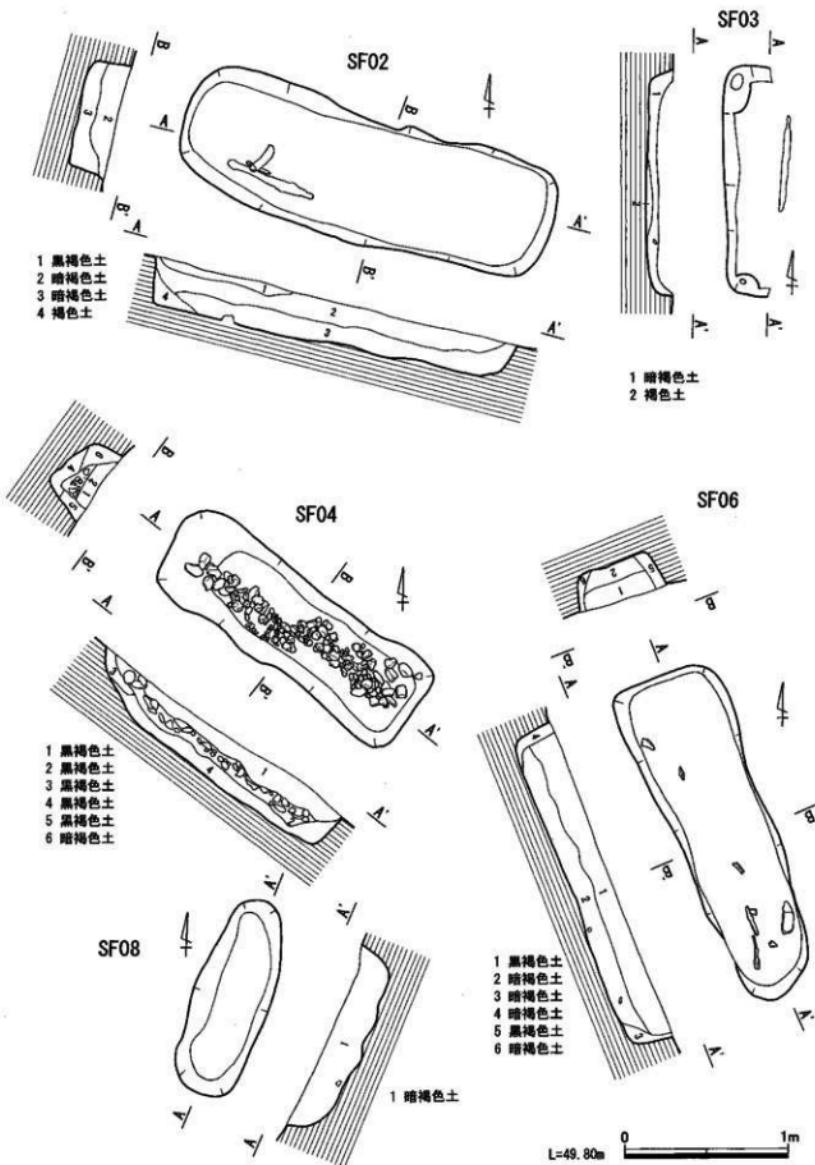
第12図 SD07、08実測図



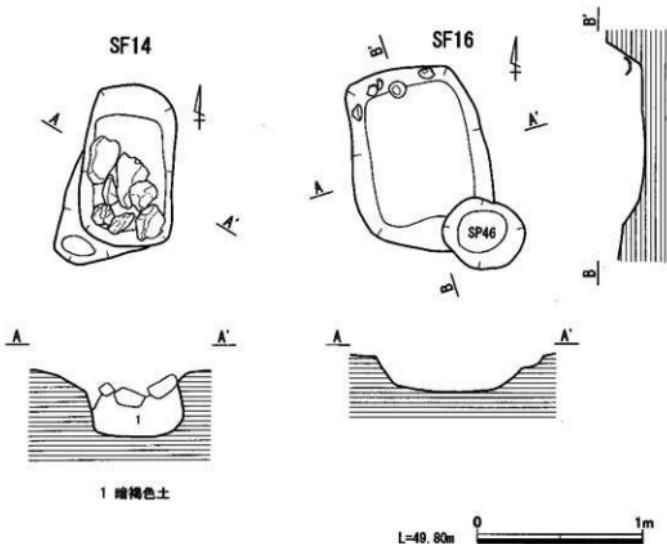
第13図 SD09実測図



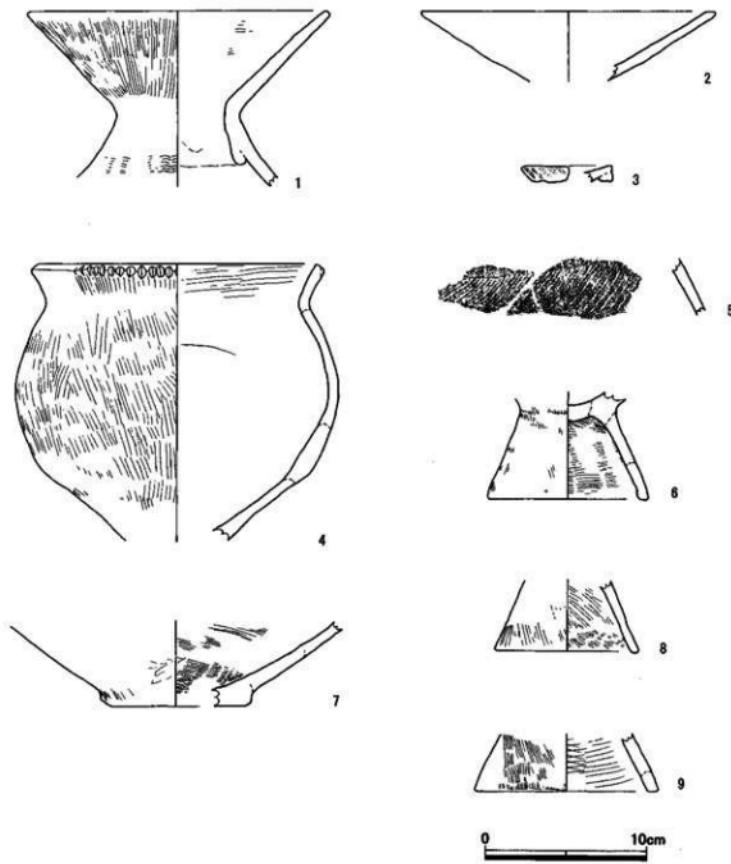
第14図 SD02、05実測図



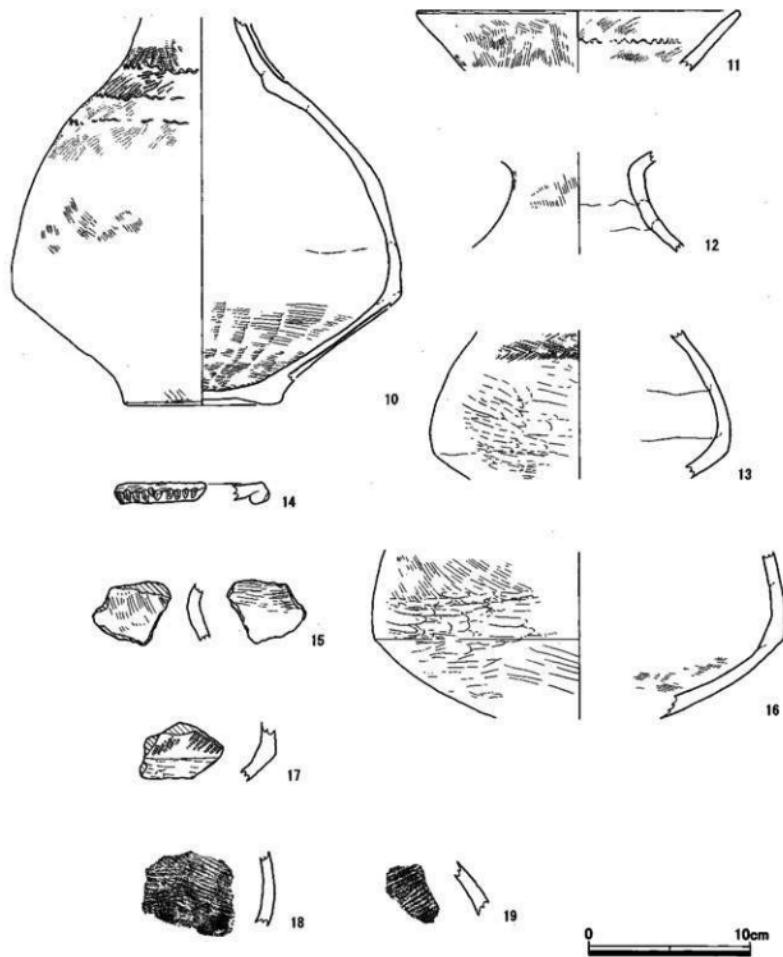
第15図 SF02、03、04、06、08実測図



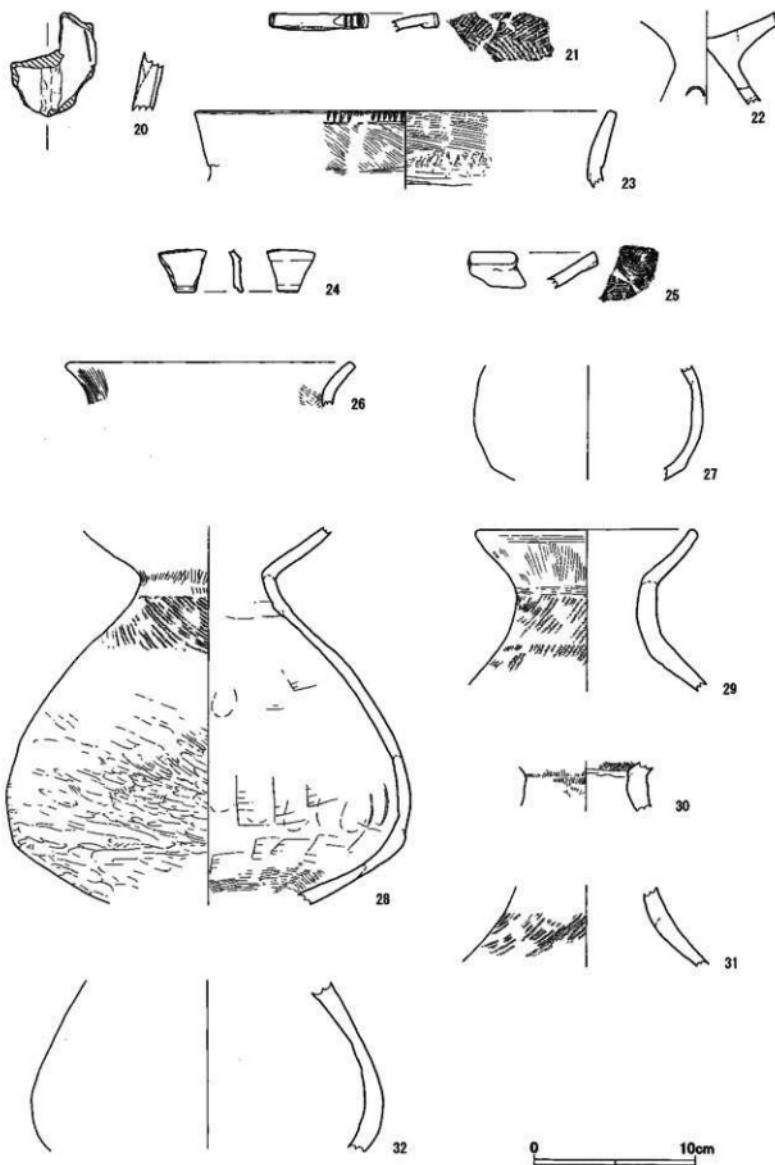
第16図 SF14、16実測図



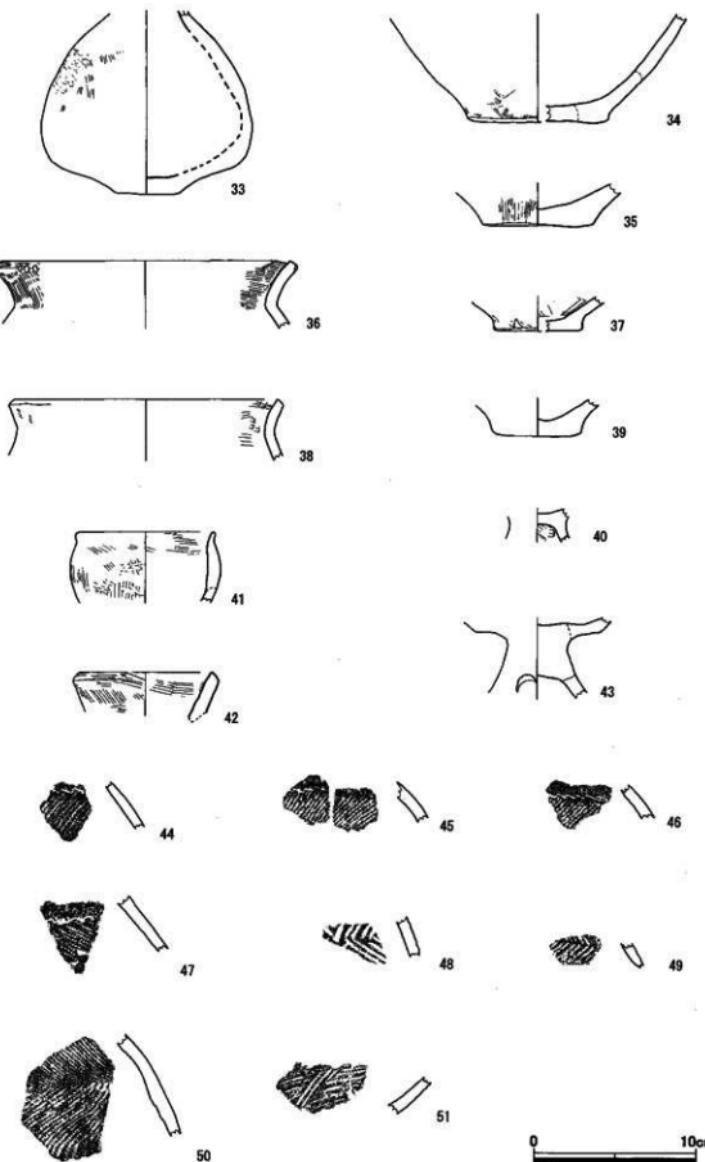
第17図 出土遺物実測図（1）



第18図 出土遺物実測図 (2)



第19図 出土遺物実測図 (3)



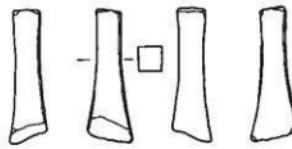
第20図 出土遺物実測図 (4)



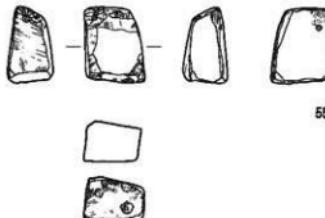
52



53



54



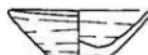
55



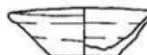
56



57



58



59



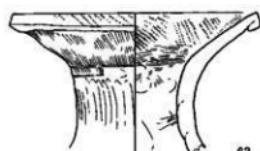
60



61



62



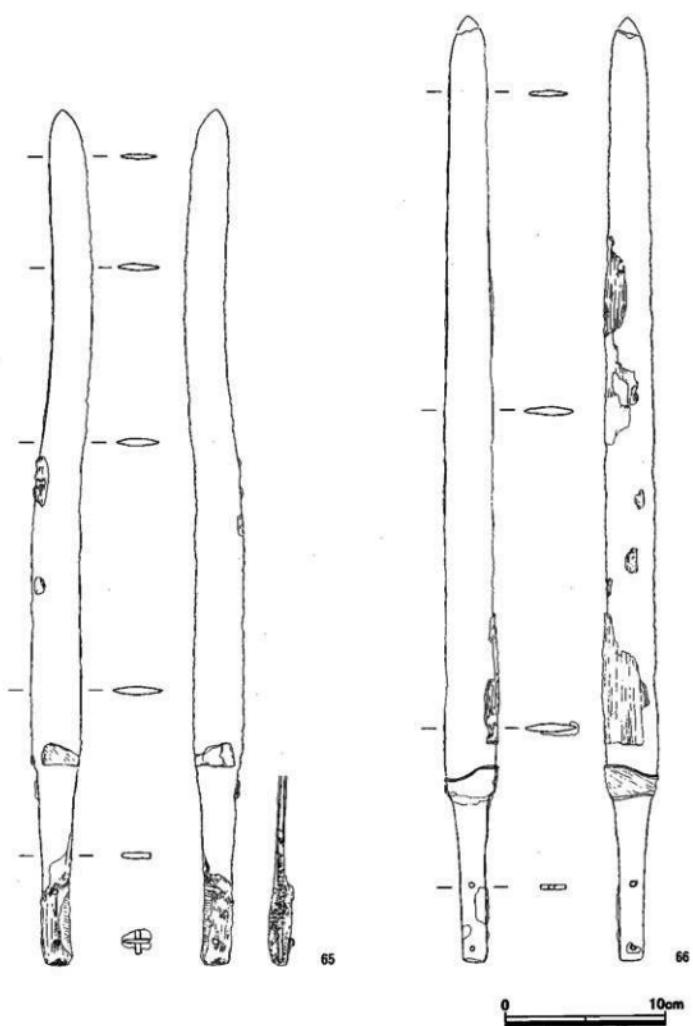
63



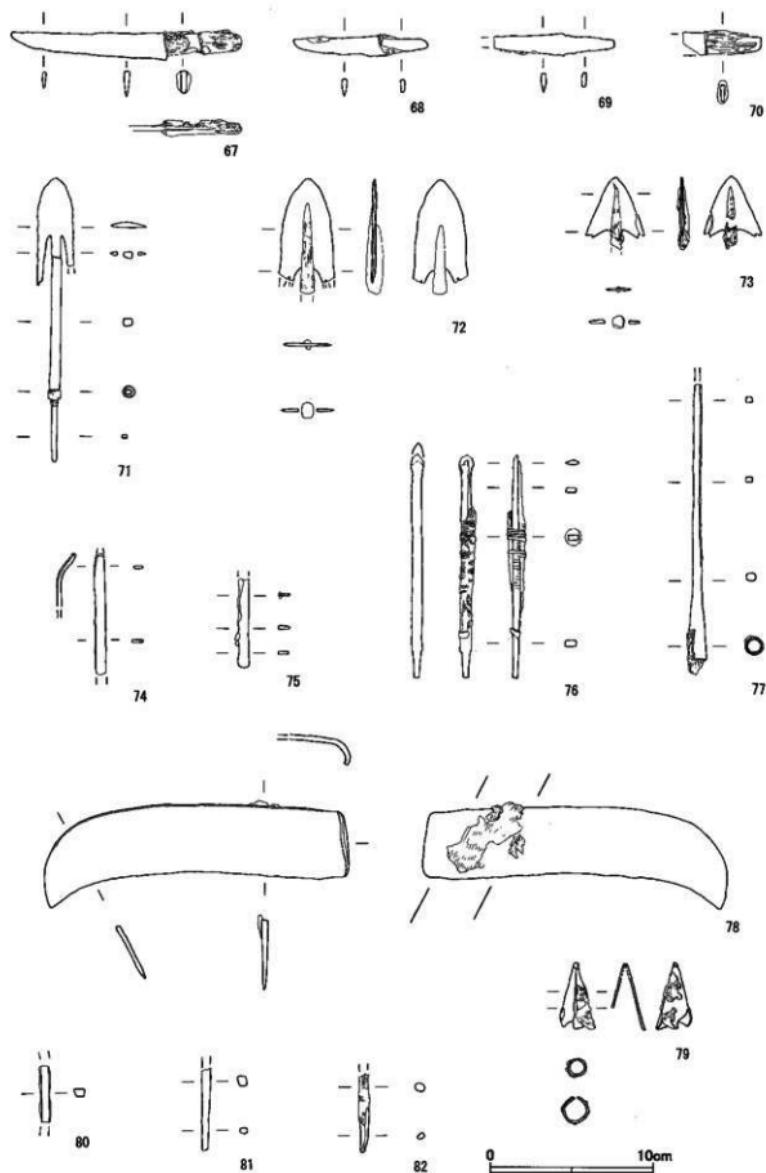
64



第21図 出土遺物実測図(5)



第22図 出土遺物実測図 (6)



第23図 出土遺物実測図 (7)

## 4　まとめ

高田遺跡第35次発掘調査では、弥生時代後期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、方形周溝墓、古墳時代中期の土坑墓、小円墳の周溝及び近世の土坑墓が発見された。平成元年度に調査された範囲のすぐ西側を調査することができ、当時調査範囲の制約で不明であった部分を明らかにすることができた。

弥生時代後期の竪穴住居であるSB01では、増築と改築とを確認することができた。想像の域を出ないが、住人が増え、面積を広げる必要が生じたのではないかと考えられる。同じく弥生時代後期の土器が出土した、方形周溝墓との詳細な時期差は明確にできなかつたが、ほぼ同じ時期と考えている。

掛川市内で初の出土となる、蛇行剣と鉄鐸が出土した。

蛇行剣は静岡県内でも出土例が少なく、袋井市石ノ形古墳、静岡市南沼上3号墳で出土しており、県内3例目の資料となる。なお、剣ではないが袋井市の五ヶ山BⅡ号墳では蛇行矛が出土している。古いものほど屈曲が多いとされており、2回という屈曲の少なさは蛇行剣の最終形態に近いものと考えられる。

蛇行剣が出土したSF02からは他に鎌、刀子が出土しており、この組み合わせは、平成元年度調査で検出された土坑墓から出土した、鉄刀、鎌、刀子という組み合わせと類似している。類似性の高い副葬品の組み合わせが近接して2例確認され、土坑墓の被葬者の性格を考えていく上で貴重な資料になると考えられる。

鉄鐸もまた、県内の出土例は少なく、沼津市的場3号墳から2点、富士市国久保古墳から1点出土しており、やはり県内3番目の資料となる。全国的には西日本での出土例が多く、鍛冶具、鉄塊、鉄滓とともに出土するが多く、鍛冶の集団の祭祀的な遺物の可能性が高いと考えられている。

SF06からは鍔や錐といった木工に関わる遺物が出土している。鉄鐸が出土したSF03は鍛冶職、SF06は木工職と、工人に関わる遺構である可能性が高い。和田岡古墳群に被葬された首長クラスではないが、それに伴う工人集団の長的な人物の墓ではないかと考えられる。高田遺跡内またはその周辺に工人集団の集落が築かれていた可能性も高く、今後の調査成果に期待したい。

今回の調査地点では先に述べた古墳時代の土坑墓の他にも、小円墳の周溝と考えられる遺構や、弥生時代の方形周溝墓、近世の土坑墓など、時代が違えども「墓」が多く検出されている。

立地的には高田原北東の縁辺部にあたり、東側の平野を一面に望むこともできる。今回の調査では検出されなかったが、調査地点及びその周辺には藤六古墳群が所在するとされており、やはり墓のある地点となっている。

調査地点は、継続性がなくとも「墓」が集中する場所であり、古くから墓域として意識されてきた場所と考えられる。

今後、新たな調査事例が加わることにより、その様子も次第に明らかになっていくものと思われる。

#### 参考文献

- 静岡県教育委員会 1995『ふちゅーる No3』  
浅羽町教育委員会 1999『五ヶ山B2号墳』  
袋井市教育委員会 1999『石ノ形古墳』  
(財)静岡県埋蔵文化財センター 2010『的場古墳群・的場遺跡』  
富士市教育委員会 2011『平成23年度 市民文化財めぐり』  
早野治二 2008『古墳時代の鉄鋤について』



#### IV おわりに

高田遺跡は遺跡範囲の大半が茶園であるため、和田岡原上に所在する遺跡の中でも調査事例が最も多い遺跡である。過去の調査においても様々な発見がなされ、遺跡の全容が次第に明らかになってきている。

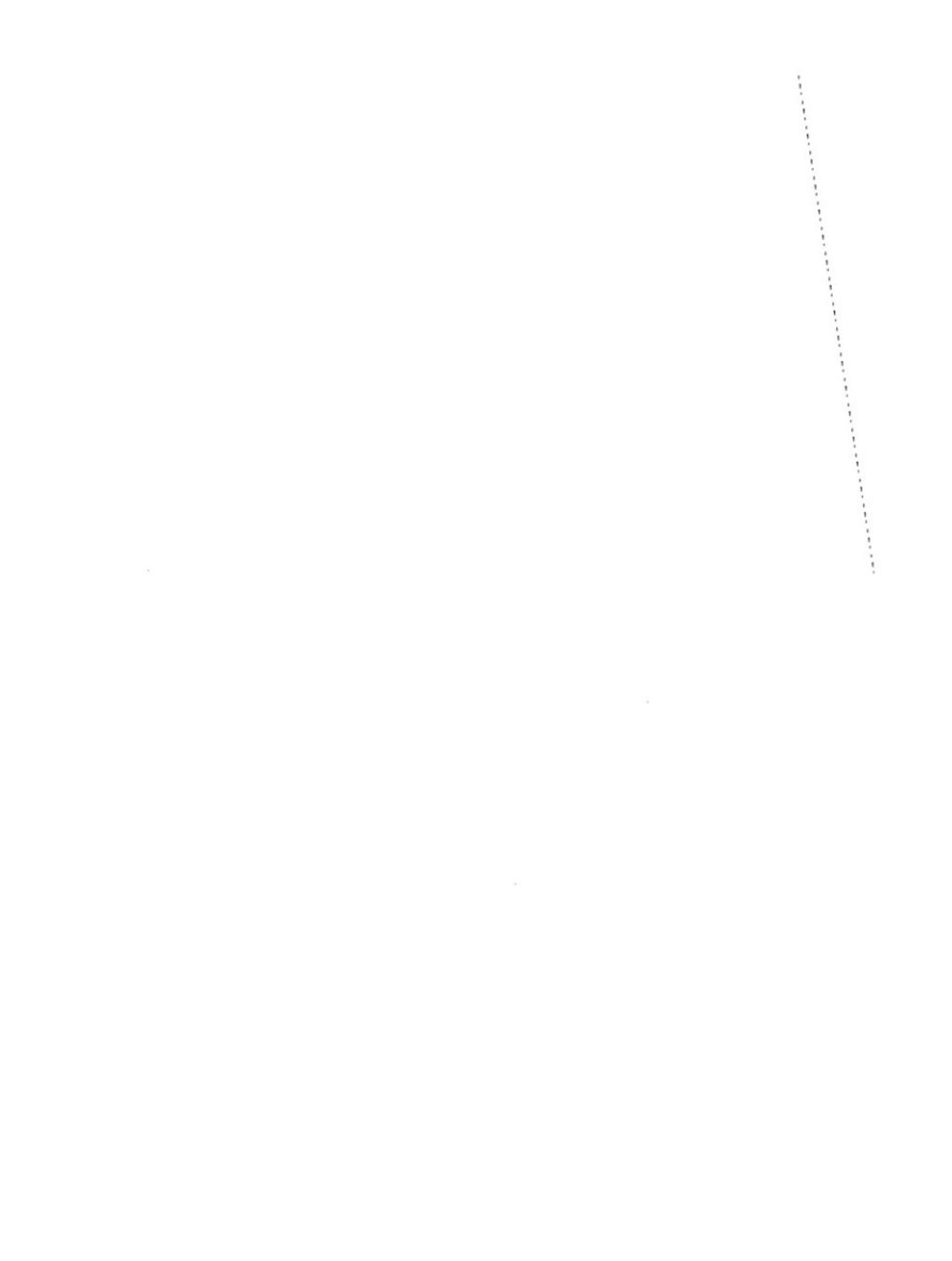
本報告書に掲載した、第33次発掘調査は、遺跡南部のあまり調査が及んでいない地点での発掘調査であり、弥生時代後期の集落の一端を検出することができた。

第35次発掘調査では、周辺の調査結果と同様に弥生時代後期の集落跡の一端が見えたとともに、市内初出土となる蛇行剣、鉄鏃が副葬された土坑墓が発見された。また、弥生時代後期の方形周溝墓、古墳時代の土坑墓、小規模古墳の周溝、近世土坑墓といったように、様々な時代の墓が発見され、古くから地域の墓域として意識されていた場所である可能性も指摘される。

以上のように、高田遺跡に新たな調査成果が追加することができた。今後も調査事例を重ねていくことで、高田遺跡の全容が明らかになることが望まれる。



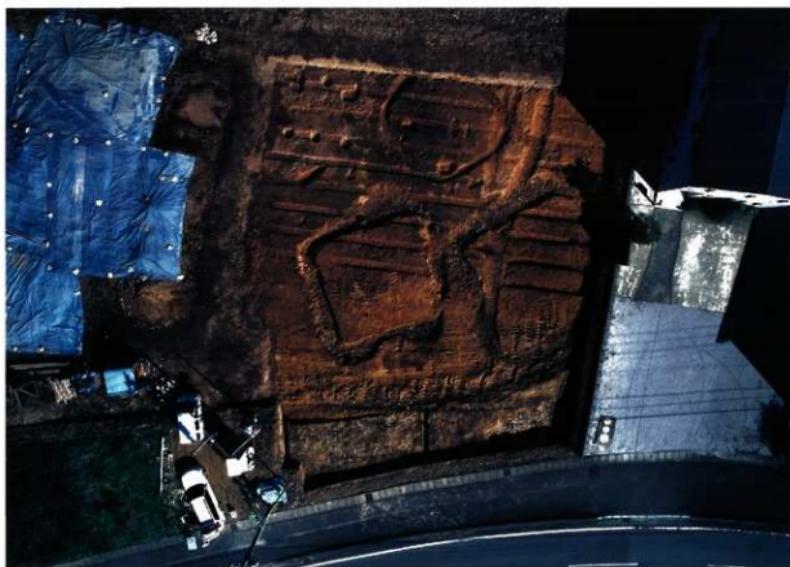
# 写 真 図 版





第35次発掘調査北半部完掘（西から）

図  
版



第35次発掘調査南半部完掘（西から）





第35次発掘調査 SB01、SH01（西から）



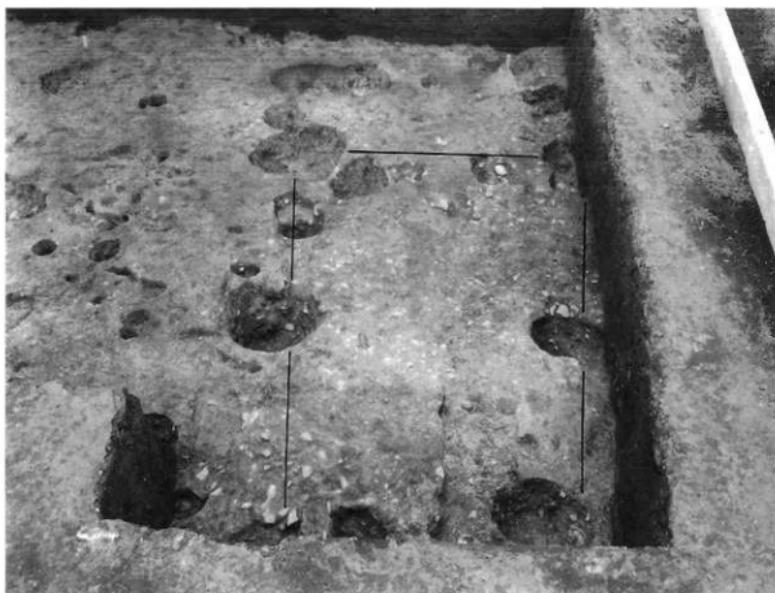
第35次発掘調査 SD04、SD09（西から）





調査区完掘（南から）

図  
版



SH01完掘（南から）

図版2



SB01焼土（南から）



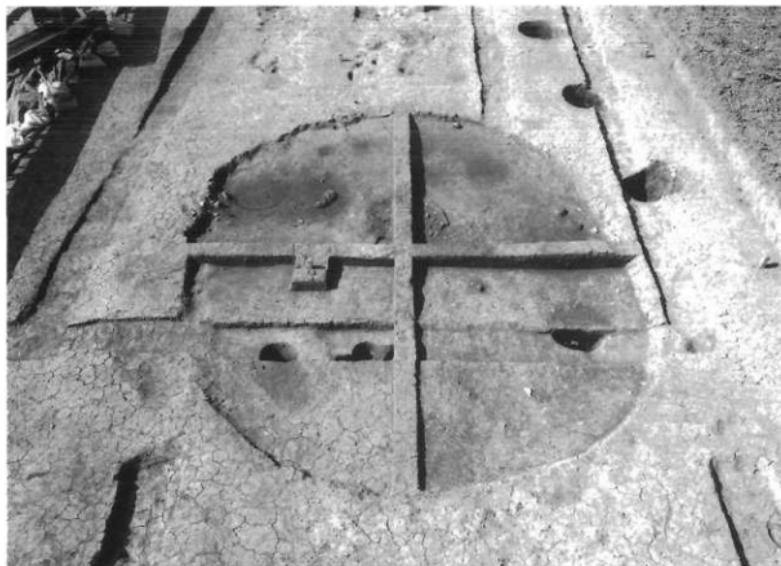
SB01完掘（南から）



A-3区 炉（南から）



SB01検出（南から）



SB01床検出（南から）

図版4



SB01炉検出（南から）



SB01炉（南から）



SB01炉断面（北から）



SB01内 SP33、SP34（西から）

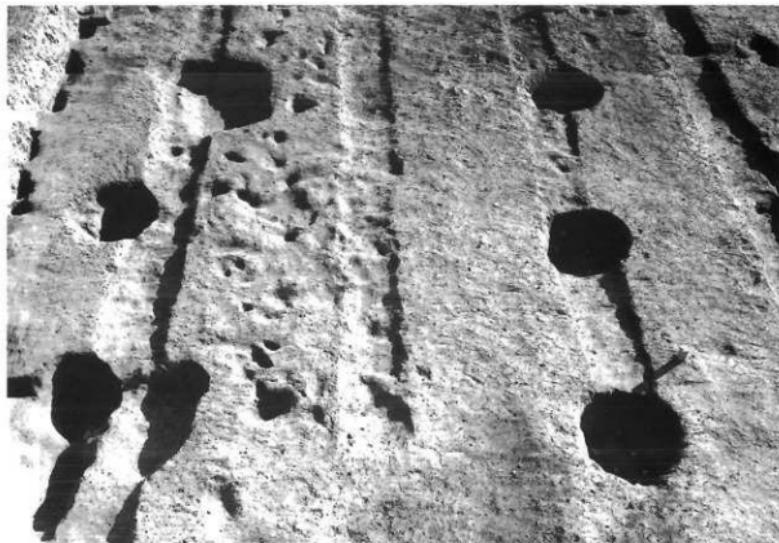
図版6



SB01内 SP35、SP36（西から）



SB01完掘（南から）



SH02完掘（北から）

図  
版



SH02内 SP46土器出土状態（南から）

図版8



SH02内 SP47土器出土状態（南から）



SD04 C-C' (西から)

図版9



SD04 D-D' (東から)



SD05、SD07 A-A' (東から)

図版10



SD09遺物出土状態（北から 土器28）



SD09遺物出土状態（北から 土器33）



SF02壳堀（北から）

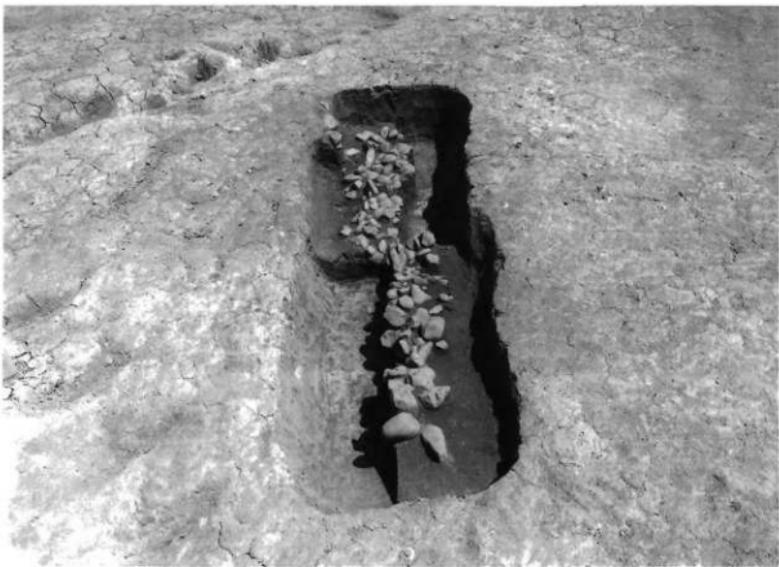


SF02遺物出土状態（北から）

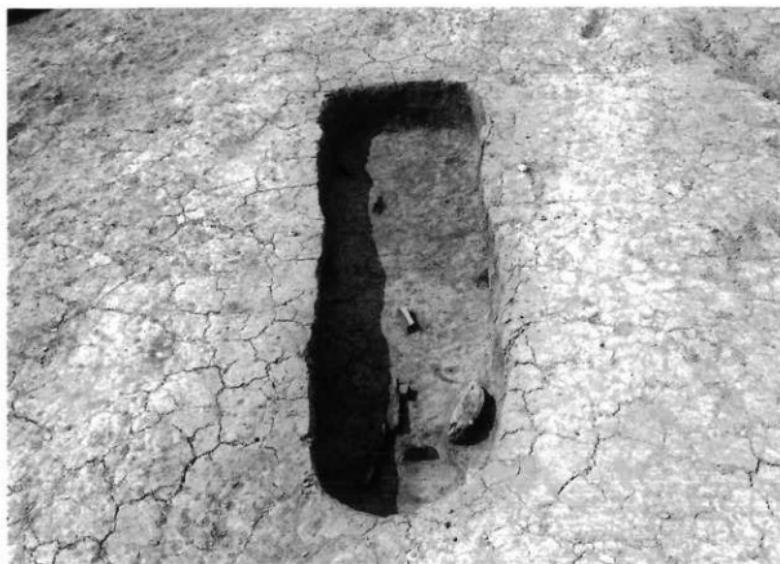
図版12



SF03 (東から)



SF04 (北西から)



SF06 (南東から)



SF14 (北から)

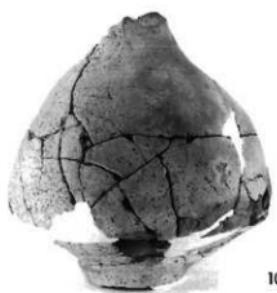
図版14



SF16 (南から)



SF16 遺物出土状態 (南から)



10



28



33

圖  
版

図版16



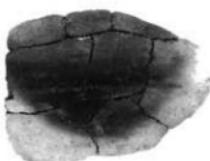
1



29



4



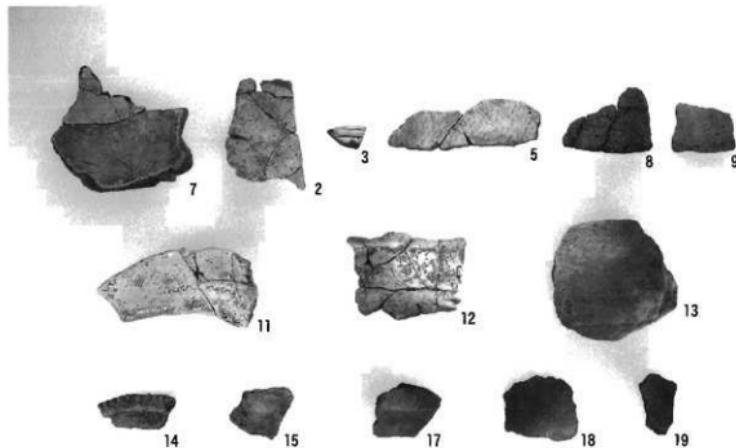
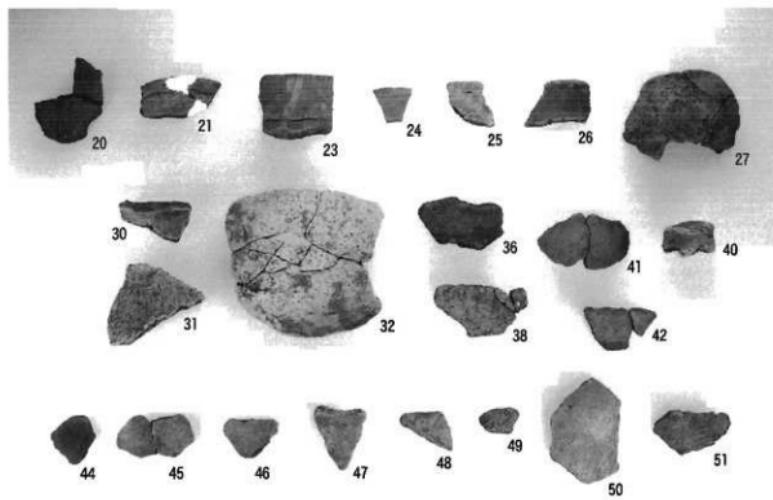
16



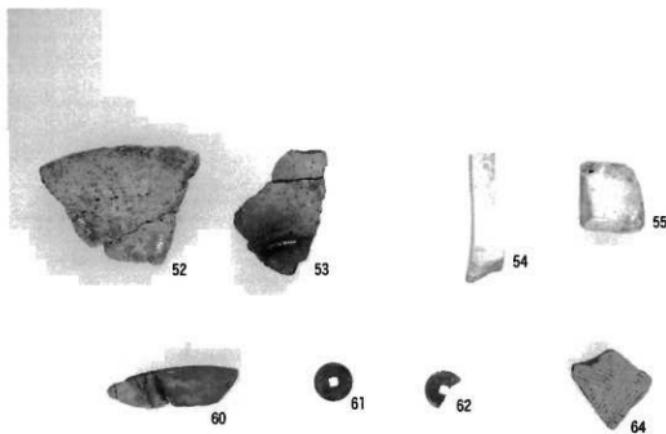
6



63

図  
版

图版18





図版20



65



66

## 報告書抄録

ふりがな	たかだいせきだい33じ だい35じはくつちょうさほうこくしょ							
書名	高田遺跡第33次 第35次発掘調査報告書							
編著者名	井村広巳 夏目不比等							
編集機関	掛川市教育委員会							
所在地	〒437-8650 静岡県掛川市長谷一丁目1番地の1 TEL 0537-21-1158							
発行年月日	平成27年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °'\"/>	東経 °'\"/>	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
高田遺跡 (第33次)	静岡県掛川市 高田	22213	243	34° 47' 07"	137° 56' 59"	2012年5月 ~ 2012年9月	73m <sup>2</sup>	個人住宅建築
高田遺跡 (第35次)	静岡県掛川市 吉岡			34° 47' 32"	137° 56' 59"	2012年7月 ~ 2012年11月	1.300m <sup>2</sup>	茶園の改植
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
高田遺跡 (第33次)	集落跡	弥生時代後期	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 小穴	土器				
高田遺跡 (第35次)	集落跡	弥生時代後期	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 方形周溝墓	土器				
		古墳時代中期	土坑墓	鉄製品、蛇形剣 鉄鏹				
要約	高田遺跡は原野谷川右岸に位置する。 第33次調査では、弥生時代後期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、小穴が発見された。 第35次調査では、弥生時代後期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、方形周溝墓、古墳時代中期の土坑墓が発見された。掛川市内初となる、蛇形剣、鉄鏹が出土した。							

## 高田遺跡第33次・第35次

### 発掘調査報告書

平成27年3月31日発行

編集 指川市教育委員会 社会教育課 文化財係

〒437-8650

静岡県掛川市長谷一丁目1番地の1

TEL 0537-21-1158

MAIL [skyoiku@city.kakegawa.shizuoka.jp](mailto:skyoiku@city.kakegawa.shizuoka.jp)

### 発行

松本印刷株式会社 袋井営業所

静岡県袋井市新屋4-5-2

TEL 0538-43-6300

